Be Going ToとAller未来形：英仏対照研究*

和　田　尚　明

1　はじめに

これまで英語を中心に定形動詞と非定形動詞の時制現象を体系的に分析しようと試みてきた小生の時制モデル（Wada 1996, 2000, 2001, 2009, 2011, 2013a, 2013b）においては，英語と同様，フランス語も人称・数・法と一体化した時制屈折辞を伴う定形動詞をもつため，英語と同じ分析がフランス語にも当てはまることが予測される．その一方で，直説法に限ると，英語は当該タイプの時制屈折辞を２つしかもたないのに対してフランス語は３つ以上もつが，この時制屈折辞は時制情報の構築に重大な貢献をする要素であるため，両言語の定形動詞が表す時制現象の違いに大きく関わりうることも，小生の時制モデルでは予測されるところである．実際，未来表現に関しては，未来時制屈折辞をもつフランス語ともたない英語の時制現象には異なる部分が多々見られるが，これに関しては，拙論（和田 2013）においてすでに，英語のwill+不定詞（以下，will未来形）ならびに未来時指示用法の単純現在形とフランス語の単純未来形ならびに未来時指示用法の単純現在形を併せて比較研究し，同モデルが両言語の未来表現が表す時制現象（類似点と相違点）の説明に対して有効であることを示した．本稿では，この線に沿った説明を推し進めて，英語のbe going to+不定詞（以下，BGT未来形）と，同じく移動動詞を用いた，類似した構成をもつフランス語のaller+不定詞（以下，aller未来形）の類似点・相違点を小生の時制モデルに基づいて説明することにする．[1]

これまで，英語のBGT未来形の研究については，特にwill未来形との比較を中心に枚挙にいとまがない（Binnick 1971, 1972; Boyd and Thorne 1969; Brisard 2001; Coates 1983; Collins 2009; Copley 2009; Declerck 1991, 2006; Haegeman 1989; Kashino 2005: Leech 1987, 2004; McIntosh 1966; Nicolle 1997, 1998; Palmer 1988, 1990; Szmrecsanyi 2003; Wada 1996, 2000, 2001, 2009; Wekker 1976）．フランス語のaller未来形の研究も，特に単純未来形との比較の中で盛んに行われてきている（Fleischman 1982; Helland 1995; Jones

1996; 南舘 1998; 練尾 1998; Smith 1997; Vet 1994; 渡邊 2014）．しかしながら，BGT未来形とaller未来形の本格的な比較研究は，筆者の知る限り，それほど多くはない．基本的には両形式を同じく「現在時指向の未来」あるいは「現在時状況の結果生じる未来」とする分析として，Fleischman（1982）やMatte（1989）などがある一方で，両形式を「異なるもの」とする分析にCelle（1997）やLarreya（2001）があるが，BGT未来形とaller未来形という２つの未来表現を一般的時制理論に基づいて体系的に説明した論考は，管見の限りではほとんどない．[2]小生の時制モデルを用いれば，一般的時制理論に基づいた体系的分析を行えるだけでなく，BGT未来形とaller未来形以外の未来表現（特に，will未来形と単純未来形）とも同じ土俵の上で比較分析することができるので，より汎用性の高い説明を与えることが可能となる．

本稿の構成は以下の通りである．まず，２節でBGT未来形とaller未来形に関する言語事実を，will未来形や単純未来形に関する言語事実を交えながら提示する．[3] 続く３節では，先行研究の概観を，特に，Celle（1997）とLarreya（2001）を中心に行い，それらの問題点を指摘する．４節では，理論的枠組みである小生の時制モデルに基づいて，will未来形，BGT未来形，単純未来形，aller未来形の時間構造を構築し，それらを用いて各時制形式が示す時制現象を体系的に分析する．ただし，相違点を明確に示し，かつ，議論を複雑にしないために，原則として当該４時制形式の時間構造は基本的用法（プロトタイプ用法）のみを扱うこととし，派生的用法ならびに周辺的用法（文法化が進んだ用法）については最低限しか扱わない．５節はまとめである．

２　言語事実

まずは，４つの未来表現，すなわち，will未来形，BGT未来形，単純未来形，aller未来形に関する言語事実の観察から始めることにする．本稿では，例文中に出てくるこれら４つの時制形式は太字で表すことにする．また，それ以外の「関連する要素」には下線を引くこととする．

はじめに，現在時指示の副詞（nowやmaintenant ‘now’）との共起性からである．この場合，英語ではwill未来形，BGT未来形ともに共起できるが（1）（3），フランス語ではaller未来形のみ共起でき（2），単純未来形は共起できない（4）．[4] なお，（1）（2）はCelle（2004/2005: 184）からの引用である．[5]

（1）a. And now I'll **have** a cup of tea, and one of those nice cucumber sandwiches you promised me.
　　b. "Now we **will cross**," she said.
（2）a. Et maintenant je **vais prendre** une tasse de thé et l'un de ces délicieux sandwiches au concombre que tu m'as promis.［(1a) に対応］
　　b. «Nous **allons traverser**, maintenant,» dit-elle.［(1b) に対応］
（3）a. I turned to face Kathleen. She was smiling like a Cheshire cat. We had a good long hug. "It's **going to be** all-right now," I told her.
（BNC A0F）
　　b. Oh yes, dear magazine, I was a victim. But not any more. Things **are going to be** different now.（BNC BMS）
（4）a. *Jean se **couchera** maintenant.（Hornstein 1990: 19）
　　b. *Jean **partira** maintenant.（Hornstein 1990: 19）

同様のことが，現在時指向の副詞（immediately，right awayやimmédiatement 'immediately'，tout de suite 'right away, immediately'）についても言える．(5) のスラッシュの前がaller未来形，スラッシュの後が単純未来形である．

（5）a. Je {**vais partir**/***partirai**} tout de suite.（渡邊 2014: 131からの再掲載）
　　b. Tu {**vas l'appeler**/***l'appelleras**} immédiatement.
（渡邊 2014: 131からの再掲載）
（6）a. ..., what **are** you **going to do** immediately?（BNC F8L）
　　b. **I'm going to tell** you right away that, although I wasn't a virgin when we married, I was until I left the train with Ludovico.（BNC CEY）
（7）a. "If anything...happened...someone **will come** over right away," she'd said.（BNC AD9）
　　b. The talk **will** immediately **follow** a screening of Tavernier's most recent box office hit These Foolish Things at:...（BNC A0E）

次に，発話時状況において下される判断や決定を表す場合，英語では通例BGT未来形は用いられずにwill未来形となるのに対して，フランス語ではaller未来形となる（Celle 2004/2005: 184）．発話時状況の判断や決定を表すマーカーとしては，英語ではOKやwellなど，フランス語ではd'accord 'OK'やeh bien

‘well’などがある．

（8）a. “Voulez-vous d’une vie propre? Comme tout le monde?” Vous dites oui, naturellement. Comment dire non? “D’accord. On **va** vous **nettoyer**. Voilà un métier, une famille, des loisirs organisés.”

b. “Do you want a good clean life? Like everybody else?” You say yes, of course. How can one say no? “OK. You’**ll be** cleaned up. Here’s a job, a family, and organized leisure.［(8a）に対応］

（Celle 2004/2005: 184）

Aller未来形のこの特徴は，フランス語では発話時と連続した事態として生じる未来の状況を表す場合はaller未来形を用いる，裏を返せば，発話時と断絶した未来の状況を表す場合はaller未来形を用いないという特徴とも関連する．（以下，渡邊 2014: 132-133からの引用例を提示する．）

（9）Je {?**vais partir**/**partirai**} dans un moment.
すぐに出発します．

（10）Je {?**vais** lui **écrire**/lui **écrirai**} demain.
明日彼に手紙を書きます．

（11）Un jour, je {??**vais t’expliquer**/**t’expliquerai**}.
いつかは君に説明するよ．

（12）Un de ces jours, tu {?**vas venir**/**viendras**} me voir.
近日中に，会いに来てください．

したがって，(9）－（12）が示すように，aller未来形は（発話時との断絶を表す）未来時指示や未来時指向の副詞類とは共起しにくい．[6, 7]

さらに，未来の総称的（一般的）な状況に言及する際は，英語では通例will未来形が用いられるのに対し，フランス語では通例aller未来が用いられる（Celle 2004/2005: 209; fn.12）．

（13）Votre friteuse **va** vous **permettre** de réaliser, en peu de temps, des plats simples et savoureux. Ces deux tableaux **vont** vous y **aider**.

（14）You **will be able to make** simple and tasty dishes very quickly in your

fryer. These two tables **will help** you.［(13) に対応］

ここでの２人称代名詞は一般の人間を指す用法であることからも，これらの例は「こうすればこうなる」といった未来の一般的な状況を表していると言えるが，ここでは，英語はwill未来形なのに対し，フランス語はaller未来形となっている．

最後に，不定の未来時を指す副詞類との共起性について見る．フランス語では，上で見た（11）（12）ならびに（15）が示すように，aller未来形は不定の未来時を指す副詞類とは共起しにくいが，単純未来形は問題なく共起する．他方，英語では，（16）（17）が示すように，will未来形，BGT未来形ともに不定の未来時を指す副詞類と共起することが可能である．

（15）Un jour, tu sais, un prince {***va venir/viendra**} me chercher. Il {***va être/sera**} grand. Il {***va être/sera**} beau.
ある日ね，王子さまがわたしを迎えに来るのよ．きっと背が高くてハンサムな人よ．（南舘 1998: 29）

（16）One day he **will** happily **walk** along a busy road.（BNC A17）

（17）“Wrong!” Buford roared. “It’s yours! So from now on you better look behind you when you walk, ’cause one day you’**re going to get** a bullet in your back...”（C. Gardner, *Back to the Future III*, p.94）

３　先行研究

３．１　同義分析

続いて，本節では，英語のBGT未来形とフランス語のaller未来形の比較を行っている先行研究を紹介し，その問題点を指摘する．まず，両形式ともに基本的には「現在時指向の未来」あるいは「現在時状況の結果生じる未来」を表すとする分析に，Fleischman（1982）やMatte（1989）などがある．しかしながら，この種の分析では，そもそも2節で見たBGT未来形とaller未来形の異なる振る舞いを説明できない．

3．2 Celle（1997）

次に，BGT未来形とaller未来形は異なるものとする分析として，はじめにCelle（1997）を詳しく見ていく．Celle（1997: Ch.2）は，２節で見た言語事実のいくつかにも触れながら，(i) aller未来形がwill未来形に対応する場合，(ii) aller未来形がBGT未来形に対応する場合，(iii) 単純未来形がBGT未来形に対応する場合に分けて考察を行っている．

はじめに，対応関係（i）の１つ目の事例として，２節でも見た，発話時状況において判断や決定を下す場合を見てみよう．D'accord 'OK'やeh bien 'well'のような副詞とそれに対応する英語の副詞は，発話時状況のみならず（(8) を参照），先行文脈の内容を受けた話者の判断や決定を下す際にも用いられる要素である．この場合，フランス語ではaller未来形が使われるのに対して英語ではwill未来形が使われ，特に，donc 'therefore'などの副詞やそれに対応する英語の副詞が共起する場合，aller未来形は発話時状況もしくは先行文脈との論理的前後（帰結）関係を打ち立て（以下，このように，発話時状況または先行文脈とそれと関連性のある命題との関係を「命題間関係」として言及することがある），それに対応する英語もやはりwill未来形である．Celle（1997: 27）から引用した（18）をご覧いただきたい．

（18）a. Ce que l'école admire dans l'écriture d'un Maupassant ou d'un Daudet, c'est un signe littéraire enfin détaché de son contenu（...）. Entre un prolétariat exclu de toute culture et une intelligentsia qui a déjà commencé à mettre en question la Littérature elle-même, la clientèle moyenne des écoles primaires et secondaires, c'est-à-dire en gros la petite bourgeoisie, **va** <u>donc</u> **trouver** dans l'écriture artistico-réaliste（...）l'image privilégiée d'une Littérature qui ...

b. Between a proletariat excluded from all culture, and an intelligentsia which has already begun to question itself, the average public produced by primary and secondary schools, namely lower middle class, roughly speaking, **will** <u>therefore</u> **find** in the artistic-realistic mode of writing（...）the image «par excellence» of a Literature which...［(18a) に対応］

この事実に対して，Celle（1997）は次のように説明する．Aller未来形は発話時と連続した事態として生じる未来を表すので，発話時状況もしくは先行文脈を受けての判断や決定を下す際に用いられる．他方，will未来形のwillは法助動詞であり，「予測」のモダリティ（発話時における話者の心的態度の一種）を表す．「予測」のモダリティは，発話時において当てはまる話者のリアクションとしても用いることができるので，発話時状況もしくは先行文脈との関連性を表せる．したがって，will未来形は発話時状況もしくは先行文脈を受けての発話の際に用いられうる．このように，両形式ともに発話時との関連性を表せることが，この言語環境において両形式が用いられる理由である．それに対して，BGT未来形は「発話時において（未来の状況の実現に向けて）すでに事態が進行中である」こと（自己完結的状況）を表す．それゆえ，発話時状況または先行文脈に依存して成立する未来の状況に言及する場合にはそぐわない．

発話時状況もしくは先行文脈を受けて下す話者の判断や決定を表すことを示す副詞がなくても，文脈から示唆される場合もある．この場合も，フランス語ではaller未来形，英語ではwill未来形が用いられるのがふつうである．[8]

（19）a. Tous cancres, tous punis, crachons-nous dessus et hop! au malconfort! C’est à qui crachera le premier, voilà tout. Je **vais** vous **dire** un grand secret, mon cher. N’attendez pas le Jugement dernier. Il a lieu tous les jours.

b. All dunces, all punished, let’s all spit on one another, and – hurry! to the little-ease! Each tries to spit first, that’s all. I’**ll tell** you a big secret, mon cher. Don’t wait for the Last Judgment. It takes place every day. ［(19a）に対応］

（Celle 1997: 29）

（19）では１人称主語であることもあり，aller未来形とwill未来形は「意志」を表し，その決心を引き起こしているのが先行文脈であることは，文脈から明らかである．

対応関係（i）の２つ目の事例へと移る．これも２節で見たように，総称的（一般的）な文脈においては，フランス語ではaller未来形で表すところを英語ではBGT未来形ではなく，will未来形もしくは単純現在形で表すのがふつうである．[9]

（20）a. Votre friteuse **va** vous **permettre** de réaliser, en peu de temps, des plats simples et savoureux. Ces deux tableaux **vont** vous y **aider**. Les temps de cuisson sont donnés à titre indicatif. Vous les ajusterez en fonction de vos goûts et des quantités à frire. ＜（13）より広い文脈に言及＞

b. You **will be able to make** simple and tasty dishes very quickly in your fryer. These two tables **will help** you. The cooking times are given as an indication only. Adjust them according to your own preferences and the quantities being cooked.［(20a）に対応］
＜(14）より広い文脈に言及＞

（Celle 1997: 30-31）

Celle（1997）の説明は，以下の通りである．まず，総称的文脈において，フランス語ではaller未来形が用いられるところに英語ではwill未来形が用いられるのは，ともに特性（属性）を表すことができるからである（これは，両形式が特定的文脈で用いられないということではない）．Will未来形では，同じタイプの状況の反復から推し測った特性(属性)に未来時指示が加わるのに対し，aller未来形では，特性（属性）に加えて，不定詞状況の現実化を前提としない「予測可能性」を表し，当該状況の質的特徴づけを強調する（質的特徴づけが前面に出てくる場合は，単純現在形に対応する）.[10]（20）は，料理に関する一般的な指示なので，質的特徴づけに加えて未来性も兼ね備えた総称的状況を表しており，したがって，aller未来形はwill未来形に対応している．この環境においてaller未来形がBGT未来形に対応しないのは，BGT未来形が未来において具現化する特定的状況を表すため，原則として特性（属性）あるいは質的特徴づけを表すことができないからである.[11]

次に，対応関係（ii）である，aller未来形がBGT未来形に対応する場合へと移ろう．この場合，当該状況は文脈的独立性をもつ特定的状況を表し，かつ，上で見た命題間関係も表さない．文脈的に独立した命題とは，他の状況に依存することなく，自らのみで自己完結した命題のことを言う．例として（21）を見てみよう．

（21）a. The rock'll fall.（Binnick 1972: 3）

b. The rock is going to fall.（Binnick 1972: 3）

Binnick（1972: 3）によると（cf. also Wekker 1976: 127），（21a）はそのままでは「省略的（elliptical)」であるが，（21b）はそのままでも省略的ではなく，自らの状況だけで自己充足的である．ここで言う「省略」とは，依存すべき別の節がなかったり，先行文脈において提示されるべき何かが欠けているという意味である．この意味で，will未来形は依存的状況・付随型命題を表すのに対して，BGT未来形は自己完結的状況・独立型命題を表す．それに対して，フランス語の単純未来形とaller未来形の違いは時間指示的な違いのみであり，単純未来形は発話時と断絶した未来を表すのに対して，aller未来形は発話時と連続した未来を表し，付随型命題でも独立型命題でも可能である．

以上を念頭において，無生物主語の例である（22）（23）を観察してみよう．

（22）a. C’est là, lors de la cérémonie d’ouverture, que le dernier des 5000 jeunes relayeurs recrutés portera le flambeau jusqu’ à la vasque. «Avec ce parcours, La Poste **va montrer** qu’elle assure très bien une mission qu’elle réalise tous les jours», confie le responsable de la communication JO de La Poste à l’Evénementiel.

b. It is then, at the Opening Ceremony, that the last of the 5000 young relay runners recruited will carry the torch up to the basin. “With the relay, La Poste **is going to show** how well it carries out its daily mission,” La Poste’s Olympic communications officer told L’Evénementiel.［（22a）に対応］

（Celle 1997: 35）

（23）a. Quel que soit le résultat obtenu, il n’aura jamais existé: si je gagne, je serai une idole, si je perds, je serai une merde! Mais j’aurai vécu de très bons moments. J’en profiterai d’ailleurs, quoi qu’il arrive, pour aller voir les amis courir, Piccard à Val-d’Isère et Michaël Prüfer aux Arcs. Ça **va être** grandiose!

b. Whatever the results, it will be as though it had never existed: if I win, I’ll be a hero, if I lose, I’ll be a nobody! All the same, it’ll have been great. In fact, whatever happens, I’ll take the opportunity to go and see my mates. It’**s going to be** fantastic!［（23a）に対応］

（Celle 1997: 35）

（22）では，当該部分が会話部分ということもあり，先行文脈とは関係なく，La Poste紙がいかに日々の使命を実行するのかを示すことが，発話時においてすでに決まっており，その時点で当該状況を引き起こす条件は存在しない．したがって，当該状況は独立型命題を表す．（23）では，先行文脈で「何が起ころうと仲間に会いに行く機会を得る」ということが示されており，発話時において当該状況はその実現に向けてすでに事態が進んでいると言える．したがって，これも独立型命題を表す．特に，（23b）のBGT未来形の部分にanywayを加えることができることからも，ここでの主張が保証される．また，（22）（23）はともに，当該状況に関してすでに発話時において事態が進んでいるという点で発話時との連続性を表していると解釈できるので，フランス語ではaller未来形が用いられている．それゆえ，aller未来形とBGT未来形が対応する．

Aller未来形がBGT未来形に対応するもう１例として，生物主語の例である（24）をご覧いただきたい．

（24）a. Je lui dis: — Enfin, ça y est!
— Quoi?
— Les Arabes!
— Quels Arabes?
— Les Arabes qui sont là, avec vous! ... Prévot me regarde drôlement, et j'ai l'impression qu'il me confie, à contre-cœur, un lourd secret:
— Il n'y a point d'Arabes...
Sans doute, cette fois, je **vais pleurer**.

b. I said:
"At last, eh?"
"What do you mean?"
"The Arabs!"
"What Arabs?"
"Those Arabs here, with you!"
"Prévot looked at me queerly, and when he spoke I felt he was reluctantly confiding a great secret to me:
"There are no Arabs here."
This time I know I **am going to cry**.
［（24a）に対応］

（Celle 1997: 37）

ここでは，考察対象であるaller未来形とBGT未来形は，sans doute ‘most probably’やI knowと共起しているので，１人称主語を取っていても意志性に関しては弱い．しかし，高い蓋然性を示す表現と共起したり，「話者が知っている」と述べたりしていることから，実現性の高い未来の状況に言及していることは分かる．したがって，発話時との連続性を表すaller未来形ならびに発話時においてすでに事態が進行中であることを示すBGT未来形ならば，この状況に適合するということで両形式が選択されているということになる．(25) も，当該文にはmaintenant que ‘now that’やnow thatが存在するために話者の確信を表すと言えるので，(24) と同様，aller未来形とBGT未来形が用いられている．[12]

(25) a. Tenez, maintenant que vous **allez** me **parler** de vous, je vais savoir si l'un des buts de ma passionnante confession est atteint.
b. Why, now that you **are going to talk** to me about yourself, I shall find out whether or not one of the objectives of my absorbing confession is achieved.［(25a) に対応］

(Celle 1997: 37)

Aller未来形とBGT未来形が対応する場合で，意志の解釈が出てくる場合は，発話に先立ってすでに存在している意志を表すことになる．(26) をご覧いただきたい．

(26) a. Je lui dis que je **vais** le **présenter** à ma famille, il veut fuir et je ris.
b. I tell him I'**m going to introduce** him to my family. He wants to run away. I laugh.［(26a) に対応］

(Celle 1997: 39)

発話時と連続した未来を表すaller未来形は，発話時における事態の進行に関しては中立的なので，発話時より前から存在する意志と矛盾するわけではないし，発話時において事態が進行していることを表すBGT未来形では，発話時よりも前に意志決定がなされ，それに基づいた事態の進行が発話時において当てはまると解釈される．特に，１人称主語の場合に，この対応関係が生じやすい．

最後に，対応関係（iii）である，単純未来形がBGT未来形に対応する場合を考察する．Celle（1997）によると，この対応関係は稀であるが，なぜ生じるかというと，以下の理由による．まず，フランス語の単純未来形は，あらかじめ発話時状況との関わりを構築しないまま，いきなり未来の状況に言及できる．すなわち，（発話時との関連で）未来の定位（future definite position）があらかじめ確立されていない状況下でも用いることができる．Will未来形は未来の定位がなくては用いられにくく，（単純未来形にはある）未来時に関する指示的自立性がない．Will未来形が未来に言及するためには，未来の定位を確立する必要がある．これも，will未来形が依存的状況を表すがゆえである．一方のBGT未来形は，be goingという進行形を含むため，発話時状況に未来時指示の兆しが内在化しており，未来の定位を確立する必要がない．BGT未来形が自己完結的状況を表すことからの帰結である．以上の特徴から，未来の定位が確立されない文脈においては，フランス語の単純未来形はwill未来形には対応できず，BGT未来形に対応するというのがCelleの主張である．

具体例で検証してみよう．（27）をご覧いただきたい．

（27）a. Ecoute-moi. Nous allons toutes deux cet après-midi à Providence consulter un médecin que **nous ramènerons** avec nous. Christine restera ici, et c'est Dinah qui prendra soin d'elle. Veux-tu me promettre que tu n'iras pas près de la chambre de Christine pendant notre absence?

b. Listen. We are both going to Providence this afternoon to consult a doctor, and we **are going to bring** him back here with us. Christine is to remain here, and Dinah will look after her. Will you promise me that you will not go near Christine's room while we are away?
［(27a) に対応］

（Celle 1997: 40）

ここで，「プロヴィデンスへ行くこと」と当該未来表現が表す「彼を連れ戻すこと」はそれぞれ独立した命題を表しているが，（27a）の単純未来形は単に未来の状況を予言しているだけであるのに対して，（27b）のBGT未来形は（発話時の前にすでに決定された）主語の意志に力点が置かれている．

この例を用いてフランス語の単純未来形がBGT未来形に対応するのを説明

する前に，今一度，本稿で扱う４つの未来表現と未来の定位の関係について確認しておこう．英語では，will未来形は非自立的未来時指示（付随型命題）を表すために，別の要素によって未来の定位が確立される必要があるが，BGT未来形は現在進行中の事態の延長線上に生じる未来の状況（独立型命題）を表すため，その形式の中に未来時指示の基盤があり，未来の定位を必要としない．フランス語では，単純未来形は命題のタイプに関係なく発話時と断絶した未来を表すので，未来の定位の有無に関係なく用いることができるのに対し，aller未来形は発話時と連続した未来を表すので，通例（発話時から独立した形での）未来の定位は表さない．以上を念頭において（27）に立ち戻ると，「彼を連れ戻すこと」は先行文脈に依存していない独立型命題なので（先行文脈が原因となって引き起こされる命題を表しているわけではないので），英語ではwill未来形は使えず，BGT未来形となるが，フランス語では未来時指示であれば命題のタイプに関係なく単純未来形が使えるので，ここで用いられていると説明できる．

この特徴づけは，英語では未来時言及の際，まず未来時指示の基盤を含意するBGT未来形で未来時に言及した後で，その定位に照応する形でwill未来形が用いられるのに対して，フランス語では単純未来形でいきなり未来の定位を表せるので，この形式によって未来時に言及した後，それに照応する形で再び単純未来形が用いられうることを説明する．（28）はこのことを示す例である．

（28）a. Donc, sur ce plan-là, j’ai confiance et je me **ferai** un réel plaisir de skier là-dessus. Le ski de vitesse en démonstration aux Jeux **constituera** une superbe vitrine pour notre sport.

b. So I feel quite confident on that score and I’**m** really **going to enjoy** skiing on it. Speed skiing as a demonstration sport at the Olympics **will constitute** a superb show case for our sport.［（28a）に対応］

（Celle 1997: 41）

また，この特徴づけは，フランス語において，単純未来形による未来時言及の後でそれに照応する形でaller未来形が用いられうることも説明する．（29）をご覧いただきたい．

（29）a. «Mon petit chéri **sera** bien mignon, bien raisonnable, il **va** se **laisser**

mettre des gouttes dans le nez bien gentiment.»

b. “My little darling **is going to be** very sweet, very good, he’**ll let** me put the nice drops in his nose.”［(29a) に対応］

(Celle 1997: 41)

(29) において，英語ではBGT未来形の後にwill未来形が用いられるパターンのところに，フランス語では単純未来形の後にaller未来形が用いられている．これは，aller未来形が自らは未来の定位を確立しないが，単純未来形が確立した未来の定位との関わりで未来時に言及することができるからである．[13]

Celle (1997) の主張をまとめると，次のようになる．

A．Aller未来形は，発話時と連続した未来を表し，発話時状況・先行文脈との関連性（命題間関係），特に，論理的前後関係を構築できる．また，総称的・非特定的な未来の状況をも表し，その中身は依存的状況・付随型命題（照応的関係）である．これらの場合，英語のwill未来形に対応する．

B．（フランス語の）単純未来形は，発話時と断絶した未来を表し，未来の定位を表すことも表さないことも可能である．未来の定位が示されない場合，英語では（will未来形は，通例，未来の定位なしでは用いられないので）BGT未来形が対応する．

C．BGT未来形は，事態が未来に生じることに向けて現在進行中であることを表し（したがって，発話時を定点として内在化しており），特定的な未来の状況を表す．その中身は，自己完結的状況・独立型命題である．この場合，フランス語では（発話時と断絶した未来を表す単純未来形は用いられないので）aller未来形が対応する．

D．Will未来形は，発話時との関連性を表し，未来時言及に関しては，依存的状況・付随型命題（照応的関係）を表す．発話時と連続しているわけではないので，未来時指示の際は未来の定位を必要とする．

E．意志性に関しては，aller未来形もBGT未来形も表せるが，両形式が言い換え可能な場合は，発話時に先んじて意志が存在する場合である．発話する際に成立する意志を表す場合，aller未来形はwill未来形に対応する．フランス語の単純未来形は発話時との断絶を表すので，形式がもつ意味としては現在に当てはまる意志を表せない（語用論的に「意志性」を帯びることは排除しない）．

以上から，Celle（1997）の分析は，aller未来形とBGT未来形を単に現在時指向の未来表現というだけでは説明できない現象を説明でき，かつ，他の未来表現（特に，will未来形やフランス語の単純未来形）との関連性も捉えられるという点ですぐれた分析と言える．

しかしながら，問題点もある．まず，一般的時制理論に基づいた説明になっていないため，体系的な分析とはなっていない．小生の時制理論を用いた分析を行えば，この点は解消される．

次に，同じ時制形式でも用法にいくつかのバリエーションがある点の扱いが不明で，かつ，なぜそれらが同一形式から生じてくるのかを動的に捉えられる仕組みになっていないように思える．例えば3.3節で見るように，will未来形は「現在時における推測」を表すことができるが，Celle（1997, 2004/2005）は未来時言及のwillも認識的法助動詞とするので，未来時言及のwill未来形の場合との時間的な値の違いをどう表すのかが求められる．また，will未来形が意志を伴う解釈と伴わない解釈を受ける場合では時間的な値にどう影響を与えるのかといった問題も生じてこよう．小生の時制理論では，「時制構造」と「時制解釈」に関わる２つのレベルを分けることで，同一時制形式が異なる時間的意味構造をもち，それを基に異なる時間値を表すメカニズムが示されるので，この問題についても解決できる．

３．３　Larreya（2001）

BGT未来形とaller未来形は異なるものとする別の分析として，本節ではLarreya（2001）を概観する．Larreya（2001）は，英語のwillは法助動詞で，必然的帰結（necessary consequence）という一種の含意関係（implication）を表すとする．ここで言う「含意関係」とは，「Ａという条件が成立すれば，Ｂという帰結が生じる」といった類のものである（Larreya 2001: 120-121）．一方のbe going toは，進行形を含むことから「発話時（参照時）において事態が進行中であること」を示す（Larreya 2001: 124）．それに対して，フランス語のaller未来形は，その語彙的意味が仄めかすように「時間軸上の移動」を表すが，進行形ではないので未完了相（imperfective）を表さない．それゆえ，BGT未来形との概念的類似性（時間軸上の移動）から「発話時における事態の進行」も表せるし，また，BGT未来形と違って完了相（perfective）であるため，「時間軸上の移動」という概念とあいまって，「Ａが成立（完結）すればＢが成

立（生起）する」という含意関係も表せるとする（Larreya 2001: 125）．これによって，aller未来形はwill未来形にも対応すると主張し，両形式が対応する５つの事例を観察している．

はじめに，（暗黙の・潜在的な）条件と結びついた事実を表す場合を見てみよう．

（30）Ne t’assieds pas sur ce rocher, il **va tomber**.（Larreya 2001: 117）
（31）a. Don’t sit on that rock — it **will fall**.［（30）に対応］
b. Don’t sit on that rock — it’**s going to fall**.［（30）に対応］
（Larreya 2001: 117）

（30）のaller未来形は，（31a）のwill未来形にも（31b）のBGT未来形にも対応する．ただし，will未来形に対応する場合は，いわゆる付随型命題を表す場合で，「岩に座ったら落ちる」という依存関係を表すのに対し，BGT未来形に対応する場合は，独立型命題を表し，「座る」という状況の成立に関係なく「岩が落ちる」という状況が生じようと事態が進行していることを表す．したがって，aller未来形は，付随型命題・独立型命題の両方を表すことができる．

第２に，発話時において下す意志や決心を表す場合である．

（32）Donne-moi cette boîte, je **vais** te l’**ouvrir**.（??...je te l’**ouvrirai**.）
（33）Give me that box – I’**ll open** it for you.（??I’**m going to open**...）
［（32）に対応］
（Larreya 2001: 117）

この場合，発話時または先行文脈において何らかの原因があり，それを基に下す発話時における意志や決心を表すので，英語ではwill未来形（33）が，フランス語ではaller未来形（32）が用いられる．発話時以前にすでに下された意志や決心を表す場合についてはBGT未来形が用いられるが，aller未来形はこの場合も可能である．

第３に，性質や傾向を表す場合に，aller未来形とwill未来形は対応可能である．

（34）...Une femme se **mettra** du maquillage et s’habillera bien pour elle-

même, pas pour les autres.（...**va** se **mettre** ....）

（35）...A woman **will make** herself up and dress elegantly for herself,....（*... **is going to make** ....）［（34）に対応］

（Larreya 2001: 118）

Larreya（2001: 121）の分析では，（36）のwill未来形の場合，含意関係のAに当たる「主語を特徴づける特性の集合」が条件（ただし，この条件は背景化しているので明示されていない）を表し，その帰結として（36）が成立すると解釈できる．

（36）Boys will be boys.（Larreya 2001: 121）

同様の分析が（34）（35）にも当てはまる．すなわち，「女性を特徴づける特性の集合」が条件として与えられたならば，「化粧をし，優雅に着こなす」という帰結が生じると分析できる．フランス語ではaller未来形もこの種の含意関係を表せるので，ここで英語のwill未来形に対応する形として用いられうる．

第４に，現在時における推測の場合を見てみよう．

（37）That’**ll be** Amelia.（?That’s **going to be** Amelia.）（Larreya 2001: 119）

（38）Ça, ça {**sera/va être**} Amelia.［（37）に対応］[14]（Larreya 2001: 126）

ここでもLarreya（2001）は，含意関係による説明を行っている．まず，（39）において，条件となるAに当たる部分として，「話者はジョンが毎週土曜日にロンドンに行くことを知っていて，本日が土曜日である」ことが想定され，そこから引き起こされる推論結果Bが（39）であるとする．

（39）John will be in London today.（Larreya 2001: 121）

そして，第３の場合と同様，この場合も，条件となるAの部分が背景化され，willによって表される推論結果となるBの部分が前景化していると考えている．したがって，（37）でも，例えば，「アメリアが来訪する予定の時刻にブザーが鳴る」ことが条件となって，「アメリアだろう」という推測が導かれると分析できる．Aller未来形もこの含意関係を表せるので，（38）が示すように，こ

こでもwill未来形に対応する解釈が可能となる．

最後に，命令や提案などの指示を表す用法の場合，aller未来形がwill未来形に対応しうることを見ておく．

（40）Linda, vous m’**appellerez** ce numéro, s’il vous plaît.（...vous **allez** m’**appeler**....）

（41）Linda, **will** you **get** me this number, please?（...? you **are going to get** me ....）［（40）に対応］ （Larreya 2001: 119）

この場合，発話時における話者の発語内効力が条件Ａであり，それによって生じる未来時の状況が帰結Ｂであるという解釈ができる．この関係は，ここで言う含意関係の一つと解釈できるので，ここまで見てきた理由から，（40）のaller未来形，（41）のwill未来形ともに可能となる．（40）の単純未来形が可能なのは，指示内容が生じるのは未来だからである．

以上，Larreya（2001）の説明を，特にaller未来形がwill未来形に対応する場合を中心に見てきた．Larreya（2001）も，各未来表現のもつ特性に帰結させた統一的説明を試みており，その点は説得的であるが，Celle（1997）と同じような問題点を指摘することができる．１つは，一般的時制理論に基づいた説明でない点が挙げられる．もう１つは，例えばwill未来形の各用法を「必然的帰結」という概念で統一的に説明しようとしているが，各用法間にある共通点は表せても相違点を説明することができない．これらは，小生の時制理論では対処可能である．

４　時間構造に基づく分析

４．１　合成的時制理論 の概観

ここまで，言語事実の観察と先行研究の概観ならびに問題点の指摘を行ってきた．本節では，これらを統一的に説明するための枠組みとして，まず，一般的時制理論である小生の合成的時制理論（Wada 1996, 2000, 2001, 2009, 2011, 2013a, 2013b; 和田 2013, 2015）を概観する．次に，それに基づいて英語のwill未来形・BGT未来形ならびにフランス語の単純未来形・aller未来形の時間構造を構築し，各時制形式の時間構造のバリエーションを一部示すことで，当該時制形式がもつ用法間の共通点と相違点を示せるだけでなく，異なる時制形式間

の類似性をも捉えられることを示す．

まず，本時制理論は，抽象的な（スキーマティックな）時間的意味情報，すなわち，文法的時間情報を担う時制構造レベルと，時間軸上に投射された認知的時間情報を担う時制解釈レベルを区別する．文法的時間情報を構造化したものが「時制構造（tense structure）」で，話者が時制形式選択を行う際の動機づけを与える．他方，認知的時間情報を構造化したものが「時間構造（temporal structure）」で，時制形式が当該言語環境において表す時制解釈値（時間値）を聞き手が導きだすための土台となる時間的意味構造である（話者の側からは，聞き手がそのように解釈すると想定して時間的意味構造を構築すると仮定できる）．

次に，本時制理論では，時制構造の構築に貢献する３種類の要素が想定されている．１つ目の要素として動詞語幹があり，これは出来事時を表す．出来事時とは「当該状況の関連する部分に対応する時点もしくは時間帯」と定義される．

２つ目の要素として，人称・数・法などの文法的直示概念を表す要素と一体化した時制形態素であるA-形態素（絶対時制形態素）がある．A-形態素は，文法的時間帯である「時間区域」を時制構造内に確立する．時間区域は，文法的時間の直示的中心として機能する「話者の時制視点」との時間的位置関係によって，その値が決まる．以上から，英語には現在時制形態素と過去時制形態素の２種類のA-形態素が存在し，それぞれ「現在時区域」（話者の時制視点を含む時間区域）と「過去時区域」（話者の時制視点よりも時間的に前にくる時間区域）を表す．他方，フランス語には単純過去時制形態素，半過去時制形態素，現在時制形態素，未来時制形態素の４種類のA-形態素が存在し，はじめの２つが「過去時区域」を，現在時制形態素が「現在時区域」を，未来時制形態素が「未来時区域」を表すことになる．

３つ目の要素として，人称・数・法などの文法的直示概念を表す要素と一体化していない時制形態素であるR-形態素（相対時制形態素）がある．R-形態素は，出来事時とそれを測る基点である基準時との時間関係を表す．英語やフランス語などの西欧言語では，定義上，非定形マーカーがR-形態素ということになり，相対的時間関係である「基準時と出来事時との時間関係」を表す．

以上の観察から，英語とフランス語では，定形動詞はA-形態素と動詞語幹から成る時制構造情報をもつのに対して，非定形動詞はR-形態素と動詞語幹から成る時制構造情報をもつことになる．

最後に，本時制理論は，助動詞・準動詞・動詞ユニットも，本動詞と同じく，独自の出来事時を表すことができるという立場に立つ．したがって，will未来形・BGT未来形・aller未来形はすべて，本動詞である不定詞が出来事時を表すのに加えて，（法）助動詞もしくは動詞ユニットも独自の出来事時を表すということになる．

4．2　時間構造

4．2．1　Will未来形

前節で分析の基盤となる合成的時制理論を概観したので，本節ではそれに基づいて構築される４つの未来表現の時間構造を見ていく．[15] まずは，will未来形からである．未来時指示の時間構造は図１（i）に，意志未来の時間構造は図１（ii）に，現在時指示の時間構造は図１（iii）に図式化される．なお，本稿で図示される時間構造は，原則として，各形式の異なる時間指示用法の原型版である（will未来形のみ「意志未来」用法も掲載する）．

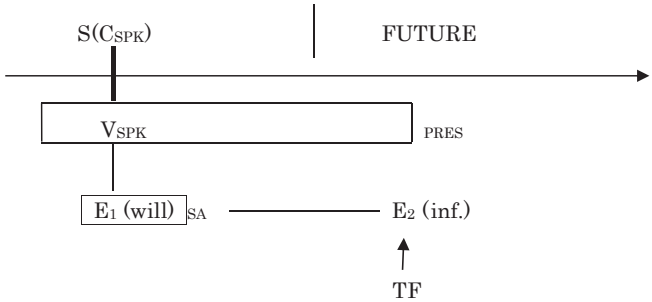

図１（i）：will未来形文の未来時指示の時間構造

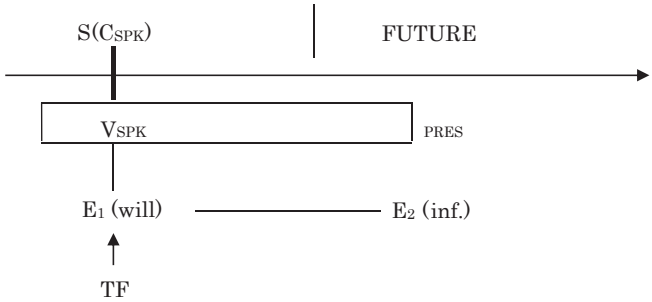

図１（ii）：will未来形文の意志未来の時間構造

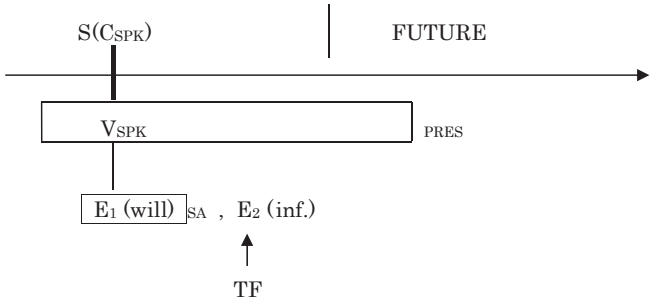

図１（iii）：will未来形文の現在時指示の時間構造

ここで，時間図式の見方に関して少し述べておく．本稿では，横矢印は時間軸を表し，矢印の先が未来を表す．S（speech time）は発話時を表し，E（event time）は出来事時を表す．V_{SPK}は話者の時制視点（speaker's temporal viewpoint）を，C_{SPK}は話者の意識（speaker's consciousness）を表し，両者を結ぶ太い縦線は両者が融合して同一時点（すなわち，発話時）を占めることを表す．これがデフォルト（無標）の場合である．[16] 話者の意識は常に発話時に位置づけられるが，それは話者の意識が「話者が認知・言語活動している時の心の状態」と定義されるからである．TFは時間焦点（temporal focus）を表し，縦矢印は時間焦点が向けられる先を表す．時間焦点は，話者が場面描写を行う際，任意の状況に特別な注意を向けている時に，当該状況の出来事時に当てられる焦点である．この焦点は，当該出来事時が複数存在する場合はより着目している状況と結びついた出来事時に，特定的状況を表す場合はその出来事時に当てられる．長方形は文法的時間帯である「時間区域（time-sphere）」を表し，

PRES付き長方形は「現在時区域」を表す．大文字で書かれた時間は認知的時間帯である「時間領域（time-area)」を表し（例えば, FUTUREは「未来時領域」を表す），S（C_{SPK}）を含む時間領域は現在時領域である．（英仏語の）定形動詞（A-形態素をもつ時制形式）の場合，出来事時Eは時間区域内に限定される（当該時間区域内の時点もしくは時間帯を表す）が，その関係は縦線で表される．横線は時間的前後関係を，コンマは時間的同時関係（包含関係や重複関係も含む）を表す．「時間区域」と縦線で結ばれていない出来事時Eは，非定形動詞のEであり，「時間区域」との直接的関係は表さない．下つきSAで囲まれたEは，当該状況が話者の心的態度（speaker's mental attitude）を表す要素であることを示す（ここでは，willが「予測」のモダリティという話者の心的態度を表すことを示す).

図１ではすべて，「現在時区域」が「現在時領域」と「未来時領域」に対応しているが，不定詞の出来事時E_2（inf.）が「未来時領域」にあれば「未来時指示」,「現在時領域」にあれば「現在時指示」を表すことになる．図１（i）（iii）の場合，時間焦点が不定詞状況の出来事時に当てられているのは，willは認識的法助動詞で，「予測」という一種の認識的モダリティを表すのに対して，不定詞状況は命題内容を構成しており，焦点化できるのは通例命題内要素だからである(Jackendoff 1977, 中右 1994)．Willが法助動詞という立場はCelle(1997)やLarreya (2001) とも共通するが，本理論における「予測」のモダリティは,「通則や経験に基づくと当該状況が実現する可能性が高い時」の発話時における話者の心的態度と定義される．したがって，「予測」のwillの出来事時は発話時に当てはまる．他方，図１（ii）の場合，willは「意志」を表す動的法助動詞と解釈されるが,「意志」は「心の中である計画を実行することを決心すること」であるので，不定詞は意志に付随する付帯的な状況を表すと解釈される．したがって，意志未来の場合は，意志に着目することになり，willの出来事時に時間焦点が当てられる（Wada 2011: 48).[17] Will未来形が意志を伴う解釈を受ける場合，その意志は「現在時において何かを実行しようと決心する時」の当該人物の心の状態なので（Leech 2004: 62)，willの出来事時は発話時（を中心とした時間帯）に当てはまる．

具体例で確認してみよう．(42) をご覧いただきたい．

(42) a. It will rain tomorrow.
b. That'll be the postman.
c. I will go to Europe next month.

（42a）は未来時指示の例，（42b）は現在時指示の例，（42c）は意志未来の例である．[18]これらすべての例において，willは定形動詞で，A-形態素である現在時制形態素をもつ．したがって，その時制構造には「現在時区域」が存在し，デフォルトの場合なので，話者の時制視点が話者の意識と融合する．その結果，will未来形の時間構造内の現在時区域は，現在時領域と未来時領域をカバーする．Willは予測もしくは意志のモダリティを表すので，その出来事時E_1は現在時領域内の発話時と同時点に当てはまる．本時制理論では，原形不定詞形態素ø（ゼロ形態素）はR-形態素で，「基準時との時間関係は無指定」であるが，法助動詞の補部位置に生じる場合，それが確立する可能性世界の中に生じる状況を表すので，不定詞の出来事時E_2が当てはまるのはその可能世界が確立される時点（この場合，法助動詞の出来事時E_1）ならびにそれに続く時間帯に限定される（Duffley 1992, 2006）．不定詞状況が状態的状況の場合，その出来事時E_2はE_1を基準時とした同時関係もしくは後続関係を，不定詞状況が非状態的状況の場合，その出来事時E_2はE_1を基準時とした後続関係を表す．これは，状態的状況（習慣的状況や総称的状況も状態的状況の仲間である）は非有界的状況であり，問題となっている時間帯のどの時点にも当てはまりうるのに対して，非状態的状況は動的状況をひとまとめにした全体として捉えるか，時間軸上での変化を含むものとして捉える場合なので，基準時との同時関係はありえないからである．したがって，現在時指示が可能なのは，不定詞が状態的状況を表す場合のみである．状態的状況が未来時指示となるのは，未来時副詞の存在や文脈などの影響により，未来時に当てはまる時点もしくは時間帯に焦点が当てられる場合である．また，意志未来の解釈が出てくるのは，典型的に主語が１人称で人間による制御が可能な状況を不定詞が表す場合であるが，文脈による場合もある．一般に，BGT未来形に対してwill未来形は未来時指向と言われるが（Fleischman 1982），そのことは時間焦点が未来時領域に生じるE_2に当てられていることからの帰結と説明できる．[19]

以上見てきたように，will未来形の３つの時間構造は，一般的時制理論である小生の時制理論に基づいた体系的な接近法によって導かれたものである．したがって，Celle（1997）やLarreya（2001）にとって問題となった，(i) 一般的時制理論に基づいた分析ではなかった点，(ii) なぜ同一時制形式に異なる意味用法が生じるのかという疑問点，そして，(iii) 同じ時制形式で表されることを示す共通点に加えて異なる意味用法をもつことをどう表すのかという点が，本稿の接近法では解決されることになる．以下，BGT未来形，フランス

語の単純未来形，aller未来形に関しては，各時制形式の基本的な相違点をはっきりさせるために典型例に対応する原型版の時間構造しか扱わないが，本稿の接近法を用いるのには以上で見たことが背景にあることを確認しておきたい．

4．2．2　BGT未来形

次に，BGT未来形へと移る．BGT未来形の時間構造は図２に示される．[20]

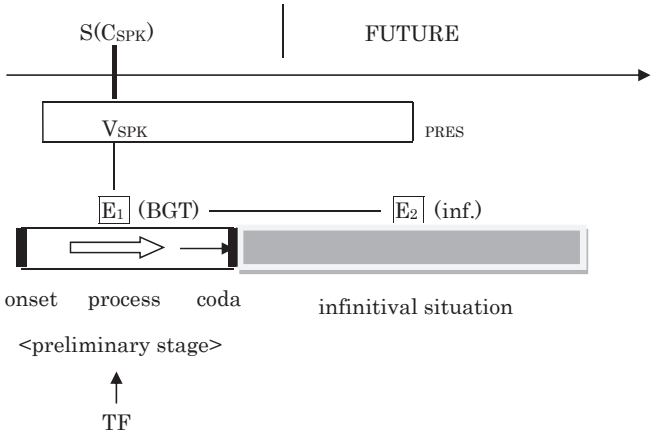

図２：BGT未来形文の時間構造

図２の見方に関して，図１で見たwill未来形と異なる部分を中心に見ていく．まず，will未来形（未来時指示版）と同様，現在時領域に当てはまる出来事時E_1と未来時領域に当てはまる出来事時E_2という２つの出来事時をもつが，E_1と関連する状況はbe going toという動詞ユニットによって表される．この動詞ユニットが表す状況（BGT状況）は内部構造をもち，不定詞状況（infinitival situation）が実現するための準備段階（preliminary stage）と解釈される．[21] この準備段階は，認知スキーマ（cognitive schema）としては，開始点（onset），進行中（時間軸上を前進中）の過程（process），終点（coda）の３部分から成り，不定詞状況のタイプや文脈によってその中身が指定される（その中身は，主観的なものまで含めて様々なバリエーションがありうる）．BGT状況（準備段階）は，発話時を挟んでそれよりも前に始まり，その後で終わるが，E_1は発話時を中心とした時間帯にのみ対応する．認知スキーマとしては，準備段階の終了が

不定詞状況の開始へとつながるが，現実世界では，これら２つの状況が実際に連続している必要はない（時間差があっても良い）．BGT状況の中の幅の広い矢印は，BGT状況が前進（進行）中であること（be goingという移動動詞の進行中の意味に由来）を示し，細い矢印は，toが表す，未来へ向かって続く時間軸上の経路（前置詞toのもつ空間的経路の意味に由来）を示す．BGT状況はあくまでも命題内容（記述の対象となる部分）の一部であり，それ自体が発話時における話者の心的態度を表すと解釈されるわけではないので，焦点化の対象になりうる．未来に生じる状況（不定詞状況）の準備段階をわざわざ明示化する形式を用いるということは，そこに話者の焦点が向けられていると考える理由になるので（そもそもわざわざ導入した部分が前景化できるのに前景化しないのなら，それを導入する意味がないので），BGT未来形では現在時に当てはまる準備段階の出来事時E_1に時間焦点が当てられる．このことは，BGT未来形がよく現在時指向と言われることを説明する（Fleischman 1982）．BGT未来形では，通例，不定詞状況が現在時に当てはまることはない．これは，図２から明らかなように，「未来の状況の実現に向けて，発話時においてすでに事態が進行中である」ということは，時間構造的には，不定詞状況は必然的に未来時に実現することになるからである．

具体例で確認してみよう．（43）をご覧いただきたい．

（43）Doc Brown **is going to take** us back to the future.

Be going toのbeは定形動詞で，A-形態素である現在時制形態素をもつ．したがって，その時制構造には「現在時区域」が存在し，デフォルトの場合，話者の時制視点は話者の意識と融合し，発話時に置かれることになる．その結果，「現在時区域」は「現在時領域」と「未来時領域」をカバーする．Be going to部分は動詞ユニットなので，beが定形動詞であることから全体で定形扱いを受ける．小生の枠組みでは，直説法の非モダル形式（法助動詞や法副詞などのモダル表現を伴わない述語）が主節（独立節）に生じた場合，通例，「断定」のモダリティを伴う（ただし，BGT状況そのものが「断定」のモダリティを表しているわけではないことに注意されたい）．「断定」のモダリティは，「当該状況を事実と断ずる時」の発話時における話者の心的態度と定義される．したがって，be going toの出来事時E_1は発話時に当てはまる．BGT状況のbe going部分が表すのは「不定詞状況が未来において実現するのに向けて事態が今進行

中である」ことである．したがって，発話時より前に開始点が生じ，発話時においては進行中の過程が当てはまる．このことから，文脈から文主語の意志を表す解釈を受ける場合，BGT状況（準備段階）よりも前に意志決定が下されていなければならない．いわゆる不定詞マーカーのtoは時間軸上未来へ向かう経路を表し，その経路の終点（目的地）が準備段階であるBGT状況の終わりと解釈されるため，不定詞状況はその後に続くと解釈されることになる．発話時において「準備段階が現在進行中で，その延長線上に不定詞状況が生じる」と断じているため，不定詞状況が未来において実現する蓋然性は高くなると言える．（43）では，不定詞状況である「ブラウン博士が我々を未来へ連れて帰ってくれる」状況の準備段階として，例えば，「現在タイムマシンの修理が進んでいる」状況などが考えられ，その準備段階はすでに発話時以前から始まっているという解釈になる．

BGT未来形が原則として未来時指示に限られることは（44）によって，BGT未来形がより実現性の高い未来の状況を表すことは（45）によって例証される．

（44）a. *They **are going to have arrived** two hours ago.（Klinge 1993: 346）
b. *Mary **is going to be** at home now.（Wada 2001: 255; Ota 1972も参照）
（45）?She's **going to have** twins, but she isn't pregnant yet.
（Nicolle 1998: 230）

（44）では，BGT未来形は現在時指示や過去時指示の副詞類とは共起できないことが示されている．（45）では，準備段階は通例「彼女が妊娠している状態」と解釈され，このまま行くと「双子の出産」が実現すると解釈される．したがって，but以下で準備段階を打ち消すと容認性が下がるのである．[22, 23]

4．2．3　フランス語の単純未来形

今度はフランス語の未来表現へと移る．まずは，単純未来形からである．未来時指示の単純未来形の時間構造は図３（i）に，現在時指示の単純未来形の時間構造は図３（ii）に示される通りである．[24]

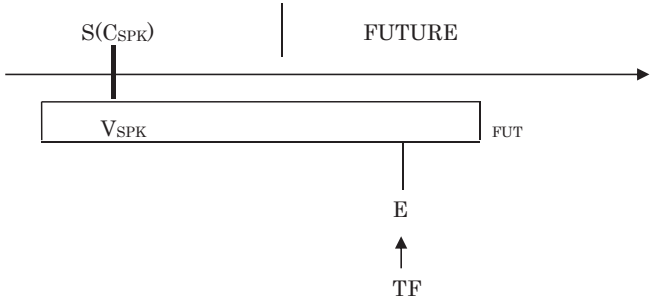

図３（i）：フランス語の単純未来形文の未来時指示の時間構造

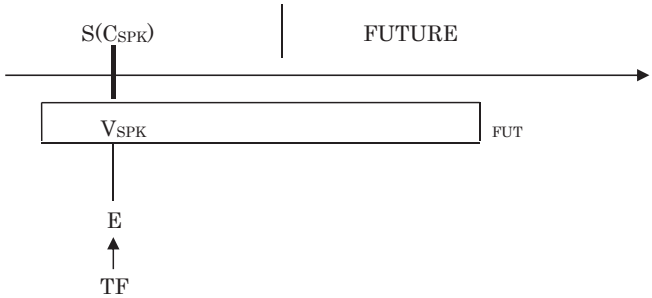

図３（ii）：フランス語の単純未来形文の現在時指示の時間構造

フランス語の単純未来形と英語のwill未来形の時間構造上の違いは，主に，単純未来形では，時間区域が「未来時区域」であることと出来事時の数が１つであることである．なお，フランス語の単純未来形が現在時における推測を表す場合は，英語のwill未来形と違って，「未来での確認（future verification）」が必要である（Celle 2004/2005; 渡邊 2014）．この点は，単純未来形の時間区域の値が「未来」であって「現在」ではないことから派生して出てくると考えている（注４を参照）.[25]

フランス語の単純未来形は定形動詞なので，A-形態素をもつ．したがって，その時制構造に内在化している話者の時制視点は，デフォルトの場合，話者の意識と融合し，発話時に置かれることになる．「未来時区域」が，「現在時区域」と同様，「現在時領域」と「未来時領域」をカバーするのは，単純未来形の出来事時が「未来時領域」だけでなく（46），「現在時領域」に当てはまる場合（47）があるからである．

（46）«Oh! lui, il［=Jérôme］**aimera** toujours le travail.»
「うん，あの子（＝ジェローム）はいつも勉強が好きでいるだろうよ．」
（André Gide, *La Porte Étroite*, p.508）

（47）Paul n'est pas là. Il **sera** malade.
ポールは来ていない．病気なのだろう．
（渡邊 2014: 142からの再掲載; cf. Celle 2004/2005）

ただし，（47）のような現在時指示の単純未来形は，現代（標準）フランス語では廃れており，あまり用いられないようである（注14を参照）．（46）のような特定の未来の状況に言及する場合，ならびに，（47）のような特定の現在の状況に対する推量を行う場合には，定形動詞の出来事時Ｅに時間焦点TFが当てられる．フランス語の単純未来形では，関連する出来事時が唯一であるため，未来時指示の場合は，当該出来事時が定点化され，それによって，未来における定位を確立することができる．特に，未来時指示の副詞（例えば，demain 'tomorrow'）や文脈によって，この定位（定時点）ははっきりすることとなる．他方，英語のwill未来形では，現在時に生じる出来事時と未来時に生じる出来事時が関与するので，たとえ後者が定点化されても，前者を経由しての後者への言及となる．したがって，この形式だけでは，未来における定位を確立できない．

最後に，本稿の時間構造に基づく単純未来形の分析は，渡邊（2014: ６．４節）の分岐的時間への位置づけに基づく観察・分析とも合致する．（48）は，渡邊による単純未来形の意味規定の概略である．

（48）単純未来形におかれた動詞事行Ｐは未来時 t_{+1} に位置づけられる．その際，発話者の視点も t_{+1} に置かれる．この t_{+1} に位置づけられるＰは他の可能世界に比べて相対的に蓋然性が高いとみなされる期待世界を構成している．P/non Pの分岐・対立を前提としたうえで，Ｐが選択される．その判断は 発話者のいる発話時点 t_0 においてなされるが，t_0 と t_{+1} の間には断絶がある．（cf. 渡邊 2014: 137-138）

図３では，発話時Ｓ（＝ t_0）にある話者の意識C_{SPK}が判断の源であり，単純未来形が表す状況が未来時（＝ t_{+1}）に生じている．時間焦点TF（＝視点）がその出来事時Ｅ（＝Ｐ）に当てられており，特に，（未来時指示の副詞や文

脈によって）定位を確立する場合は，当該状況は時間軸上の定点に位置づけられる．「期待世界」は現在の状況から見て自然延長線上に生じる可能性の高い未来の世界ということができるので，当該出来事時Ｅはその意味での「未来時領域」に生じている．ただし，当該出来事時への言及は発話時に当てはまる要素を経由しているわけではないので，その意味で両者の間は断絶しており，かつ，その実現は中立的（すなわち，P/non-Pの両方がありうる）と言える．

４．２．４　Aller未来形

次に，aller未来形に移る．Aller未来形の時間構造は図４に示される．[26]

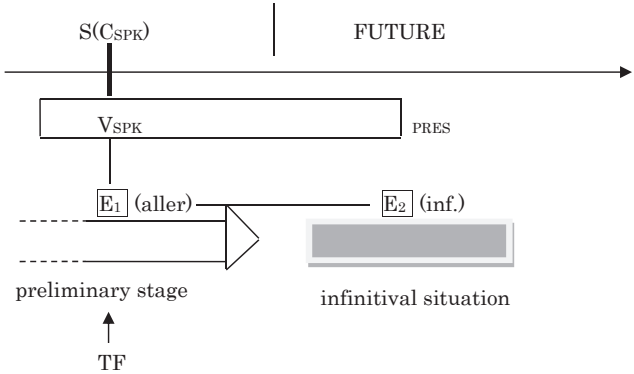

図４：aller未来形文の時間構造

図４の見方に関して，図３（i）の未来時指示の単純未来形ならびに図２のBGT未来形との関係を中心に見て行く．まず，現在形のallerは定形動詞で，Ａ-形態素である現在時制形態素をもつ．したがって，その時制構造には「現在時区域」が存在し，デフォルトの場合，話者の時制視点は話者の意識と融合し，発話時に置かれることになる．その結果，「現在時区域」は「現在時領域」と「未来時領域」をカバーする．Aller状況は，不定詞状況が実現するための準備段階を表す．これは単純未来形にはない要素であるが，BGT未来形には対応する要素がある．ただし，BGT未来形との違いもある．まず，aller自体は進行形ではないので，開始点（onset）の示唆もなく，進行（前進）中の過程も前提ではない．すなわち，aller未来形の準備段階は必ずしも「発話時において進行（前進）中」であることを表しているわけではない．したがって，準備段

階については，発話時よりも前から続いていることを含意しているわけではなく（この点は矢印の破線部分によって表されている），発話時から始まることも可能である．また，toも存在しないので，準備段階の終点を含意しているわけではなく，したがって，認知スキーマ的にはaller状況の終点の直後に生じると見なされる不定詞状況の実現を必ずしも含意しない．すなわち，toが表す「未来への経路」は，aller未来形の時間構造には明示化されていない．なお，BGT未来形の場合と同じく，わざわざ未来に生じる状況（不定詞状況）の準備段階を表す要素としてallerを用いている以上，それが表す状況に話者の焦点が向けられていると考えられる．したがって，aller未来形では，時間焦点TFはallerの出来事時E_1に当てられる．

具体例で見てみよう．

（49）a. «Je **vais** vous **ouvrir** le chemin...»
（Maurice Leblanc, *Arsène Lupin Le Comtesse de Cagliostro*, p.113）
b. “I’**m going to clear** the way...”［（49a）に対応］
（*Countess Cagliostro*, p.81）

（49a）では，不定詞が表す「話者が道を切り開く」という状況の実現への方向づけがなされており，それを仄めかすのが準備段階（例えば，すでに何らかの策を講じている状態）の存在である．この例のように，通例，移動動詞allerによって未来への方向性が示されているので，不定詞状況の出来事時E_2はそれに後続する時間帯，すなわち，未来時領域において実現することが仄めかされる．しかしながら，準備段階の終点であり，かつ，不定詞状況の実現を示すtoが存在しないため，認知スキーマ的には不定詞状況は準備段階に後続して必ず生起しなければならない必然性はない．したがって，aller未来形の文法化が進み，allerが表す状況の意味漂白化が進むことで，（50）が示すように，現在時における推測も表せるようになったと説明できる（この場合，図４におけるE_2が現在時領域内のE_1と同時間帯に展開することになり，それがこの用法の時間構造となる）．[27]

（50）Ça, ça **va être** Amelia.（cf. (38)）

最後に，本稿のaller未来形の時間構造は，渡邊（2014: ６．５節）の直線

的時間への位置づけに基づく観察・分析とも合致することを確かめておく．（51）は，渡邊によるaller未来形の意味規定の概略である．

（51）迂言的未来形（＝aller未来形）は，その構成要素となる移動動詞allerの意味として漸進性を反映し，不定法で表される事行Ｐへと向かって増進しつつある準備段階をt_0に位置づけるものである．発話者の視点はt_0に置かれる．分岐的時間への位置づけではなく，可能世界への分岐をもたない直線的時間への位置づけだけである．それゆえ，もっぱら，Ｐだけが想定されることになる．Ｐのt_{+1}への位置づけは本質的ではなく，未来時指示表現との相関によって結果的になされる．t_0とt_{+1}の間に断絶はなく，allerによって連続性が保証されている．

（cf. 渡邊 2014: 145）

図４では，E_1がallerの表す状況の出来事時で，時間軸上を未来に向けて進む抽象的状況（準備段階）と関連し，その準備段階は発話時Ｓ（＝t_0）を中心とした時間（現在）に当てはまる．その向かう先は不定詞状況（＝不定法が表す事行Ｐ）の出来事時E_2である．発話者の視点がＳ（＝t_0）に置かれるということは，時間焦点がE_1に当てられることと合致する．BGT未来形と同様，未来時（＝t_{+1}）での実現に向けて進む準備段階の延長線上に不定詞状況がくることから，P/non-Pの対立はなく，期待世界への直線的位置づけ（時間軸上への位置づけ）のみを表すが, BGT未来形と違って, aller未来形の準備段階は「発話時において進行中」ではなく，toに当たる要素もないため，準備段階の終結点ならびに不定詞状況の実現を含意していない（それに向けて事態が進むことを表しているだけである）．この直線的位置づけ，ならびに，未来へ向かうさまが,（単純未来形と比べて）発話時Ｓ（＝t_0）と未来時（＝t_{+1}）の間に断絶がないことを示す．また,（現在時に当てはまる）準備段階が未来へ向かうさまを表し，通例，その後に不定詞状況がくることが仄めかされるから，未来時指示を示す文脈においては未来時に言及することが可能となる．

４．３　説明

前節では，小生の時制モデルに基づいて，英語のwill未来形・BGT未来形，フランス語の単純未来形・aller未来形の時間構造を提示した．これにより，２

節で見た言語事実が説明でき，かつ，３節で見た先行研究の問題点が解決できる．

４．３．１　現在時指示・現在時指向の副詞との共起性

まずは，２節で見た，will未来形，BGT未来形，単純未来形，aller未来形と現在時指示の副詞との共起性についてであるが，単純未来形のみ共起できないのであった．

（52）I **will leave** now, mademoiselle.（BNC HGD）
（53）Things **are going to be** different now.（cf. 3b）
（54）*Jean **partira** maintenant.（=4b）
（55）«Nous **allons traverser**, maintenant,» dit-elle.（=2b）

英語では，未来時指示のwill未来形ならびにBGT未来形の時間図式（図１（i)・図２）から推測できるように，ともに，定形動詞の出来事時E_1が発話時Ｓに当てはまり，不定詞状況の出来事時E_2がそれより後続することさえ示していれば，E_2は必ずしも未来時領域（認知的未来）に生じる必要はない．すなわち，E_2はE_1に後続さえしていれば，現在時指示の副詞が確立する現在時領域内でも良い．したがって，will未来形もBGT未来形も，現在時指示の副詞と共起できるのである．

フランス語では，aller未来形（図４）に関しては，英語の場合と同様の説明が成り立つ．しかしながら，未来時指示の単純未来形（図３（i)）は，唯一の出来事時Ｅが必ず未来時領域に当てはまるので，現在時指示の副詞が確立する現在時領域内に生じることはできない．したがって，単純未来形は現在時指示の副詞と共起できない．[28]

同様のことが，現在時指向の副詞との共起性についても言える．以下に（5）（6）（7）を（56）（57）（58）として再掲する．

（56）a. Je {**vais partir**/*partirai} tout de suite.
　　b. Tu {**vas l'appeler**/*l'appelleras} immédiatement.
（57）a. ..., what **are** you **going to do** immediately?
　　b. I'**m going to** tell you right away that, although I wasn't a virgin when

we married, I was until I left the train with Ludovico.

（58）a. “If anything...happened...someone **will come** over right away,” she’d said.

b. The talk **will** immediately **follow** a screening of Tavernier’s most recent box office hit These Foolish Things at:...

英語のimmediatelyやright away，フランス語のtout de suite ‘immediately’やimmédiatement ‘immediately’は現在時指向を表すので，これらの副詞が修飾する状況の出来事時は現在時領域に生じると仮定できる．したがって，現在時指示の副詞との共起について行ったのと同じ説明が可能となる．

４．３．２　「発話時状況」や「先行文脈」を受けて発話時における判断を下す場合

次に，話者が発話時状況や先行する文脈の内容を受けて発話時における判断や決定を下す場合へと移る．これは，Celle（1997）の言う「命題間関係」を表す場合，Larreya（2001）の言う「意志・決心」を表す文脈に対応する．これらは，典型的には，フランス語のd’accord ‘OK’，donc ‘therefore’，英語のOKやthereforeなどによって明示化される．また，文脈から保証される場合もある．ここで説明の対象になる現象には，フランス語では単純未来形ではなくaller未来形を用いるが，英語ではBGT未来形ではなくwill未来形を用いるという点がポイントである．４．２節で見た，これら４時制形式の時間構造の違いによってこれらの選択における相違を説明できることを，以下で見ていく．

まず，具体例として（8）をもう一度見てみよう．ここでは，（59）として再掲する．

（59）a. “Voulez-vous d’une vie propre? Comme tout le monde?” Vous dites oui, naturellement. Comment dire non? “D’accord. On **va** vous **nettoyer.** Voilà un métier, une famille, des loisirs organisés.”

b. “Do you want a good clean life? Like everybody else?” You say yes, of course. How can one say no? “OK. You’**ll be** cleaned up. Here’s a job, a family, and organized leisure.［（59a）に対応］

ここでは，d’accordやOKよりも先行する地の文で「(話者が解説的に）誰もが清潔な生活を送りたいはずである」と述べており，それを受けて，続く会話部分で「それならば，きれいにするべきである」という判断を下している．したがって，「ＡとＢの命題間関係」を表す場合，時間構造の観点からＢにくる未来表現として適切なのは，フランス語ではaller未来形，英語ではwill未来形となる．

Aller未来形は，図４が示すように，「不定詞状況が未来時において実現するための準備段階が発話時において進む」ことを表しているが，進行中ではないため，準備段階が発話時から始まる解釈も可能であった．したがって，発話時状況や先行文脈（Ａに対応する部分）を受けて，それに対する判断を発話時において下した結果，それに続く形で準備段階も含めた当該未来状況（Ｂに対応する部分）が生じることは可能である．単純未来形の場合，図３（i）が示すように，Ｂに対応する部分の出来事時は未来時領域にのみ生じることが可能であったので，時間構造的には発話時における判断と結びつくことができない．したがって，フランス語では，単純未来形はこの場合には適切でない．

では，英語の場合はどうか見てみよう．Will未来形では，図１（i）（ii）が示すように，willの出来事時E_1が発話時に当てはまっており，その認知スキーマは「発話時において成立（生起）する心的態度もしくは内的状態（「予測」もしくは「意志」のモダリティ)」を反映している．したがって，時間構造的には，発話時状況や先行文脈を受けて，それに対する判断を発話時において下した結果生じる未来の状況に言及するパターンに適している．BGT未来形の場合，認知スキーマとして「(不定詞状況が未来時において実現するのに向けて）すでに事態が発話時において進行中である」という準備段階が存在するため，発話時において命題間関係のＢに当たる部分の一部がすでに進行中である．したがって，発話時状況や先行文脈に対する判断を発話時において下した結果生じる未来の状況に言及するのに，BGT未来形は時間構造的にそぐわない．したがって，発話時状況や先行文脈の内容を受けた話者の判断や決定を合図する副詞との共起は，時間構造的に相容れないと説明できる．同様の説明が，(18)(19）のaller未来形とwill未来形の使用に関しても当てはまる．

ここで，発話時状況や先行文脈を受けて発話時における判断を下していると文脈から判断できる例についても，確かめておく．まずは（60）である．

（60）a. «Vers Yvetot, Léonard. Comment, objecta la comtesse, mais nous

allons passer devant l'auberge!

（Maurice Leblanc, *Arsène Lupin La Comtesse de Cagliostro*, p.115）

b. "Drive towards Yvetot, Leonard," said Raoul, getting in. "But it'**ll take** us past the inn!" cried the Countess.［(60a）に対応］

（*Countess Cagliostro*, p.82）

ここでは，先行文脈である「イヴト（ノルマンディー地方の都市）へ向かうこと」を受けて発話している部分（それが「問題の小屋を通過すること」につながるという判断）に，aller未来形とwill未来形が用いられている．特に，英語版のitが"driving towards Yvetot"を受けていることから，この解釈は明らかである．

もう２例見ておこう．

（61）a. Un matin, après l'arrivée du courrier, elle me fit venir:
«Mon pauvre Jérôme, je suis absolument désolée; ma fille est souffrante et m'appelle; je **vais être** forcée de vous quitter...»

（André Gide, *La Porte Étroite*, p.514）

b. One morning after the arrival of the post, she sent for me:
"My poor Jérôme," she said, "I'm absolutely heart-broken; my daughter is ill and wants me; I **shall be obliged** to leave you...."［(61a）に対応］

（*Strait is the Gate*, p.19）

（62）a. «Je suis content que tu aies trouvé ce qui manquait à ton avion. Tu **vas pouvoir rentrer** chez toi....

（Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, p.190）

b. "I am happy you found what you needed for your machine. Now you'**ll be able to return** home."［(62a）に対応］　（*The Little Prince*, p.84）

（61）では，先行文脈である「娘が彼女に会いたがっていること」が，「彼女がジェロームをおいていかなければならない」という判断を引き起こしている．（62）は，飛行士が自分の機械（すなわち，飛行機）の修理をしようとしている場面であるが，先行文脈である「修理に必要なものが見つかる」，すなわち，「飛行機が直る」が，「飛行士が帰還できる」という判断を引き起こしている．したがって，時間構造上，この文脈に適したaller未来形とwill未来形が用いられていると説明できる．

4.3.3 未来時指示の副詞との共起性

フランス語においては，発話時状況や先行文脈を受けて発話時における判断を下す場合に単純未来形ではなくaller未来形を用いるという事実は，未来時指示の副詞との共起性の問題と密接に関わっている．もう一度（9）－（12）を見てみよう．ここでは，（63）－（66）として再掲する．

（63）Je {?**vais partir**/**partirai**} dans un moment.
すぐに出発します．
（64）Je {?**vais** lui **écrire**/lui **écrirai**} demain.
明日彼に手紙を書きます．
（65）Un jour, je {??**vais t'expliquer**/**t'expliquerai**}.
いつかは君に説明するよ．
（66）Un de ces jours, tu {?**vas venir**/**viendras**} me voir.
近日中に，会いに来てください．

これらが示すように，aller未来形は発話時と連続した未来を表すので未来時指示の副詞と共起しにくいが，単純未来形は発話時と断絶した未来を表すので未来時指示の副詞と共起できると言われる．この事実も，時間構造の観点から説明できる．Aller未来形の時間構造は，図４が示すように，「不定詞状況が未来時において実現するのに向けて準備段階が発話時において当てはまる」ことを含意するため，aller未来形が表す未来時状況は発話時にそのルーツがあると言える．それゆえ，発話時と連続した未来を表すのである．その結果，現在と切り離された未来時指示の副詞とは共起しにくいと説明できる．他方，（未来時指示の）単純未来形の時間構造は，図３（i）が示すように，唯一の出来事時が未来時領域に位置づけられなければならなかった．したがって，当該状況と発話時との間には直接の接点がないので，単純未来形は発話時と断絶した未来を表せるし，発話時と断絶した未来を表しさえすれば，未来の定時点を表す副詞とも不定時点を表す副詞とも共起可能と説明できる．

ただし，aller未来形が未来時指示の副詞と共起する場合がある．以下の例は，渡邊（2014: 134）からの借用である．

（67）Dimanche prochain, vous **allez désigner** l'Assemblée Nationale pour

cinq ans.
つぎの日曜日，みなさんは向こう５年の任期の国民議会の投票をすることになります．

（68）La décision **va aboutir** le 3 juin prochain à la fermeture de l'usine Renault.
この決定は，こんどの６月３日，ルノーの工場を閉鎖することにつながるでしょう．

（69）Il **va** y **avoir** en novembre 1995, à la fin de l'année, une conférence euro-méditerranéenne.
1995年11月，つまり年末ちかくに，ヨーロッパ・環地中海圏の会議があります．

これらは一見上で見た説明と矛盾するように見えるが，そうではない．これらの例は，文脈上，発話時との連続性が強く感じられる場合である（渡邊 2014: 134）．例えば，（67）では，すでに選挙の公示がなされ，世の中は選挙モードに突入している中での発話であるから,「次の日曜日の投票」の実現に向けて，すでに発話時においてその準備段階が当てはまっていることが仄めかされる．したがって，発話時との連続性を保証してくれる文脈の中に生じるのであれば，aller未来形は未来時指示の副詞と共起することも可能であると言える．

では，英語の場合はどうであろうか．まず，will未来形は未来時指示の副詞と問題なく共起する．

（70）a. The rest of India **will vote** tomorrow or Sunday.（BNC A8K）
b. California **will make** its final decision on its water strategy next week, when the governor's drought task force reports its findings.
（BNC ANX）
c. The Scottish National Party **will make** the constitutional issue its main campaign plank in next month's local council elections.（BNC AK9）

これもwill未来形の時間構造と矛盾がないためであると説明できる．図１（i）（ii）が示すように，未来時領域に生じる不定詞状況は，発話時における予測の対象または意志の結果生じる状況であり，当該状況自体は発話時における準備段階などの延長線上に生じる状況ではない．それゆえ，認知スキーマ的には，

不定詞状況自体と発話時の間には時間的連続性がない．したがって，不定詞状況の出来事時E_2は，問題なく未来時指示の副詞によって修飾される．

一方のBGT未来形はどうであろうか．同じGO-未来であるフランス語のaller未来形は，発話時との連続性を保証する文脈に生じなければ未来時指示の副詞との共起ができなかったのに対し，BGT未来形は，未来時指示の副詞との共起に関して特に制約はない．

（71）I have eaten nothing for five days. I've drunk some water. He brings me food, but I have touched not one crumb. Tomorrow I **am going to start** eating again.（BNC G07）

（72）That's all that we have time for on this subject today. Next week we'**re going to start** a new twelve part series on opportunities in education, in which we shall be looking at various aspects of schools today.
（BNC KRG）

（73）Next month there'**s going to be** an international conference around reproductive technologies and genetic engineering specifically to bring together the work that women in India are doing against sterilization abuse and population control with the work the women in the West are doing around genetic experimentation and invitro fertilization and egg farming – some of the anti-women scientific advances.（BNC HSL）

（71）は小説の中の日記部分，（72）はラジオ放送の一部，（73）はイギリスの第２波フェミニズム運動の雑誌からの抜粋であり，テキストタイプにも偏りがない．このことも，BGT未来形の時間構造の観点から説明できる．BGT未来形は，図２が示すように，「発話時における準備段階の終了が未来に生じる不定詞状況の生起につながる（toによって準備段階と不定詞状況が連続する）」という認知スキーマをもつので，常に不定詞状況は発話時と結びつく．[29] 時間構造内の認知スキーマが発話時との連続性を必ず保証してくれるので，BGT未来形は潜在的に常に未来時指示の副詞と共起できると言える．他方，aller未来形は，認知スキーマ的には，BGT未来形に比べてtoによる結びつきの保証がない分，不定詞状況は発話時状況との直接的結びつきがないので，不定詞状況の発話時への結びつきが保証される文脈（つまり，話しことばや発話時状況への関連性を強く示す文脈）でないと，未来時指示の副詞と共起した場合，発話時

と切り離された未来に不定詞状況が位置づけられてしまう．したがって，文脈が発話時との連続性を保証しない場合は，（63）－（66）で見たように，aller未来形は未来時指示の副詞とは共起しにくくなるのである．

４．３．４　（暗黙の・潜在的な）条件と結びついた事実を表す場合

本節では，Larreya（2001）が指摘する「（暗黙の・潜在的な）条件と結びついた事実を表す場合」を考察する．具体例として，（30）（31）を（74）（75）として再掲する．

（74）Ne t’assieds pas sur ce rocher, il **va tomber**.
（75）a. Don’t sit on that rock — it **will fall**.
　　b. Don’t sit on that rock — it’**s going to fall**.

ここでのポイントは，aller未来形が英語のwill未来形とBGT未来形のどちらに対応する解釈も可能であるという点である．まず，will未来形に対応する場合から見ていく．この解釈は，広い意味で，発話時状況や先行文脈を受けて話者が発話時における判断を下す場合に属する．Will未来形は，その時間構造（図１（i））の特性から，発話時において先行文脈を受けての判断を下す場合に用いることができた．ここでは，第１文である否定命令文の中の「岩の上に座る」という内容が当該未来表現文の内容を引き起す「条件」となっており，その内容に対する話者の判断として当該未来表現文の内容（「その岩が落ちる」）が生じると解釈できる．（なお，「条件」に当たる部分は暗示的に示されたり，暗黙の前提である場合もある．）また，aller未来形も，その時間構造の特性（図４）から，準備段階が始まるのは発話時以降という解釈が可能なので，will未来形の場合と同様，先行文脈を受けて発話時における判断を下す解釈が可能となる．

次に，aller未来形がBGT未来形に対応する解釈のほうを見る．BGT未来形の場合，その時間構造（図２）の特性から，当該条件の成就にかかわらず，BGT未来形の内容（すなわち，「岩が落ちる」こと）が発話時においてすでに実現に向かって進行中であることを表す．したがって，発話時状況や先行文脈を受けて発話時における判断を下しているわけではない．BGT未来形の場合，その準備段階は発話時において進行中であるため，発話時以前から当てはまって

いることになり，（暗示的に示唆される場合も含めて）先行する条件を受けて発話時における判断を下す解釈はできない．他方，aller未来形の場合は，その準備段階の発話時以前の部分は（時間図式・図4の破線部分が示すように）必ずしも含意されていないが，文脈が保証すれば，発話時以前から準備段階がすでに始まっている解釈も可能である．したがって，aller未来形がBGT未来形に対応する解釈を受ける場合は，文脈からその解釈が保証される場合に可能と言うことができる．

4．3．5　総称性（一般性）・属性を表す場合

今度は，未来の状況が総称的（一般的）な場合（Celle 1997の言う「総称性・属性」またはLarreya 2001の言う「性質・傾向」を表す場合）を見てみよう．具体例として，（20）を（76）として再掲する．

（76）a. Votre friteuse **va** vous **permettre** de réaliser, en peu de temps, des plats simples et savoureux. Ces deux tableaux **vont** vous y **aider**. Les temps de cuisson sont donnés à titre indicatif. Vous les ajusterez en fonction de vos goûts et des quantités à frire.

b. You **will be able to make** simple and tasty dishes very quickly in your fryer. These two tables **will help** you. The cooking times are given as an indication only. Adjust them according to your own preferences and the quantities being cooked.［（76a）に対応］

ここで注目すべきは，will未来形（図１（i））もaller未来形（図４）も，「助動詞（will/aller）＋不定詞」という形式を取っている点である．小生の時制モデルでは，Duffley（1992, 2006）に従い，不定詞は潜在的状況（具現化されていない観念としての状況）を表すと仮定している．こう仮定することで，不定詞自体は潜在的状況を表せるので，文脈上，総称的（一般的）な状況や性質（傾向）への言及など，必ずしも具体的な状況の実現を前提としない場合には，不定詞が本来的に表す潜在性が反映しているという説明が可能となる．実際，（76）は料理の仕方の解説であり，２人称代名詞は一般の人間を指す用法であることからも，これらの例は「こうすればこうなる」といった未来の総称的（一般的）な状況を表していると言える．したがって，この文脈ではaller未来形とwill未来

形が適していると説明できる．

BGT未来形がこの文脈に適さないのも，同様の観点から説明できる．以下，(35）を（77）として再掲する．

（77）...A woman **will make** herself up and dress elegantly for herself,.... (*... **is going to make** ....)

BGT未来形（図２）の場合，toの存在が不定詞状況の実現を導くので，具現化する未来の状況を表すと言える．なぜなら，toは時間軸上の目的地へと導くマーカーであり，その目的地が不定詞状況であるので，（認知スキーマとして）発話時において進行中の準備段階が終了した結果生じる不定詞状況は，（すでに準備段階が成立している時点である）現実の時間である発話時と連続した時間軸上に生じる未来の状況と認識されるからである．したがって，BGT未来形は，その時間構造上，潜在的な未来の状況を表しにくいのである．

では，フランス語の単純未来形がこの文脈で用いることができる点はどう説明されるであろうか．以下に，(34）を（78）として再掲する．

（78）...Une femme se **mettra** du maquillage et s'habillera bien pour elle-même, pas pour les autres. (...**va** se **mettre** ....)［(77）に対応］

単純未来形の場合，未来の状況に重点が置かれる解釈となるが（Celle 1997: 31），不定詞を含まないのにもかかわらず，潜在的状況を表せるのはなぜかという問題が生じる．確かに，その時間構造内（図３（i)）には，定形動詞のみが存在し，不定詞は存在しないので，潜在的状況を表す要素がない．しかしながら，BGT未来形のように，時間構造内に，認知スキーマとして不定詞状況の具現化を示唆する要素（すなわち，toに相当する要素）をもたないため，文脈的に潜在的状況を仄めかすことは可能である．特に，未来の状況は未だ生じていないために，本質的に潜在性とは親和性が高いと言える．

我々の（認知スキーマを反映した）時間構造による説明は，「aller未来形は予測可能性を表し，当該状況に対する質的な特徴づけを強調するのに対し，will未来形は同タイプの状況の繰り返しから生じる性質・傾向が未来時に当てはまる」というCelle（1997）の説明を，一般的時制理論の観点から説明したことになる．[30] 総称的価値・性質的価値も，aller未来形（図４）とwill未来形（図

１（i)）に含まれる不定詞のもつ特徴（「潜在性」）に起因しており，潜在的状況は時間軸において必ずしも具現化する必然性がないので，総称的（一般的）な状況にも対応可能だからである．同様の観点から，BGT未来形（図２）は，toの存在により，不定詞状況が義務的に時間軸上に結びつけられるため，総称的価値・性質的価値を表しにくいということになる．Larreya（2001）の観察についても，同様の説明が当てはまる．

４．３．６　不定の未来時指示の副詞との共起性

４．３．３節では，未来時指示の副詞との共起性について考察し，考察対象の４つの時制形式のうちaller未来形のみ，文脈によって発話時との連続性が保証されない限り，未来時指示の副詞との共起が難しい理由を説明した．本節では，中でも不定の未来時指示の副詞との共起性について，やはりaller未来形のみが共起しにくい理由を説明する．まずは，具体例をご覧いただきたい．

（79）a. Un jour, je {??**vais** t'**expliquer**/t'**expliquerai**}.（=11）

b. Un jour, tu sais, un prince {*va **venir**/**viendra**} me chercher. Il {*va **être**/**sera**} grand. Il {*va **être**/**sera**} beau.（=15）

（80）a. "One day I'**m going to be famous**, too," she［=Kylie Minogue］vowed silently.（BNC ADR）

b. "You're crazy," Rilla said. "You killed Zadak, but one day someone **is going to kill** you."（BNC FSL）

c. And then he looked me straight in the face, "One day, soon, Nicky, God's spirit **is going to deal** with you. One day, Nicky, you **are going to stop** running and come running to him."（BNC ALH）

（81）a. We **will meet** again one day through the fog that we will clear.（BNC A03）

b. Trusty nodded. "One day he **will learn** better about us, but in the meantime there must be some other place for us..."（BNC B0B）

c. As a book on the history of men who went to war, it takes up Pieri's challenge, and meets it handsomely. One day, perhaps, somebody **will attempt** to do for English armies what Contamine has done for French ones.（BNC EDF）

まず，aller未来形（図４）から考察する．不定詞は潜在的状況を表し，toのような要素がないために，時間構造的には，不定詞状況は時間軸上に結びつけられて具現化する必然性がない．したがって，時間軸上に位置づけるためには，例えば，時間軸上の時点をはっきり示す未来時指示の副詞などの要素が必要となる（ただし，文脈的に発話時との連続性が保証されることが前提となる），もしくは，未来の定位の確立が必要となる．さて，un jour ‘one day’のような不定の未来時指示の副詞の場合，（67）－（69）で見たように，たとえ発話時との連続性が保証される文脈であっても，言及される未来時自体は不定なので，言及時の特定化に関しては，未来時指示の副詞を伴わない場合と実質的効果は同じである．それでもあえて，aller未来形が不定の未来時指示の副詞を伴う場合，何か特別な意味合いが生じることになり，その時間値を解釈する際に発話時と断絶した未来時言及という側面を前景化させることになる．その結果，このタイプの副詞とaller未来形が共起した場合の容認性は低くなるのである．他方，単純未来形の場合であるが，そもそも当該状況の出来事時は（発話時と断絶した）未来時領域に生じるため，定・不定に関係なく未来時指示の副詞と共起可能と言える．

次に，英語の場合であるが，まずBGT未来形から見ていく．BGT未来形（図２）は，「発話時において進行中の準備段階が終了した結果，不定詞状況が未来時に生じる」という認知スキーマを反映し，かつ，toの存在により，不定詞状況は現実世界(時間軸)に結びつけられ，未来時において具現化するのであった．それゆえ，そもそも時間軸上の未来時を指示する副詞の存在を必要としない．したがって，定であろうと不定であろうと，未来時指示の副詞との共起を妨げない．Will未来形の場合（図１（i）（ii)),「予測」や「意志」のモダリティは発話時と同時点に当てはまるが，予測の対象または意志の遂行の結果生じる不定詞状況は，自らの出来事時が未来時領域に生じるということを表すだけであり，時制形式としては，未来に向けて進行したり方向づけたりする準備段階をもたないので，認知スキーマとして特に発話時との連続性を示すわけではない．それゆえ，未来の状況は潜在性をもつ状況（すなわち，総称的な状況や属性など）を表しても良いし，文脈から，または，（定・不定にかかわらず）未来時指示の副詞と共起して，時間軸上に結びつけられても構わない．以上の理由から，英語の場合は，どちらの時制形式も不定の未来時指示の副詞と共起可能である．

４．３．７　独立型命題（自己完結的状況）を表す場合

Aller未来形が独立型命題（自己完結的状況）を表す場合にBGT未来形に対応することは，３．２節で見た通りである．それに対するCelle（1997）の説明は，aller未来形は発話時と連続した未来を表す形式であり，命題タイプについては，付随型命題（依存的状況）も独立型命題も表せるので，独立型命題を表す場合，BGT未来形に対応するというものであった．Celle（1997）も両形式が成り立つ要素の特性からこれらの特徴を導きだしている点で説明的ではあるが，本稿の分析は，一般的な時制理論の観点から他の時制形式との関係（相違点や類似点）も明確化できるので，より包括的に説明することができる．

まず，「意志」の読みが出てこない場合から見ていく．この場合，典型的には無生物主語を取る．例として（23）を取り上げ，（82）として再掲する．

（82）a. Quel que soit le résultat obtenu, il n’aura jamais existé: si je gagne, je serai une idole, si je perds, je serai une merde! Mais j’aurai vécu de très bons moments. J’en profiterai d’ailleurs, quoi qu’il arrive, pour aller voir les amis courir, Piccard à Val-d’Isère et Michaël Prüfer aux Arcs. Ça **va être** grandiose!

b. Whatever the results, it will be as though it had never existed: if I win, I’ll be a hero, if I lose, I’ll be a nobody! All the same, it’ll have been great. In fact, whatever happens, I’ll take the opportunity to go and see my mates. It’**s going to be** fantastic!［（82a）に対応］

図４が示すように，aller未来形は，「allerの表す準備段階が，未来時における不定詞状況の生起に向かって推移する」という認知スキーマが反映した時間構造をもつのであった．この準備段階は，必ずしも発話時において進行中である必要はないが，発話時よりも前にその推移が始まることは可能であった（矢印の破線部分が示唆する部分）．（82a）では，先行文脈で「何が起ころうと仲間に会いに行く機会を得る」という意志が示されており，aller未来形が表す不定詞状況については，発話時においてその実現に向けて準備段階が推移している，すなわち，進行中であるという解釈は可能である．したがって，（不定詞自体は潜在的状況を表すものの）このaller未来形では，不定詞状況は時間軸上の特定時に結びつけられ，命題間関係を表さない独立型命題を表すことになる．そ

れゆえ，英語ではBGT未来形が対応する．BGT未来形は，その時間構造の特徴から（図２），不定詞状況が独立型命題である特定的状況を表すが，それは「発話時においてすでに準備段階が進行中（前進中）であること」ならびに「toの存在によりその終点が実現し，不定詞状況の生起を含意すること」を表すからである．

同様の説明が，以下の例にも当てはまる．

（83）　Le plateau se creusa en une dépression que le chemin suivait. Tant bien que mal, ils parvinrent à l'endroit où s'amorce l'escalier. Il fut taillé jadis en pleine falaise, sur l'initiative d'un curé de Bénouville, et pour que les gens du pays puissent descendre directement jusqu'à la plage. Le jour, des orifices pratiqués dans la craie l'éclairent et ouvrent des vues magnifiques sur la mer, dont les flots viennent battre les rochers et vers laquelle il semble que l'on s'enfonce.

«Ça **va être** dur, fit Rolleville. Nous pourrions vous aider. On vous éclairerait.

（Maurice Leblanc, *Arsène Lupin La Comtesse de Cagliostro*, pp.73-74）

（84）　They came to a dip in the plateau and, after some more trouble, reached the Priest's Staircase. It had been hollowed out of the cliff many years ago on the advice of the priest of Bénouville so that the villagers could have access to the beach below. During daylight, it was lit by openings cut into the chalk. Through these, one could admire the sea waves as they dashed against the rock and into which the traveler seemed to be on the point of plunging.

"It's **going to be** a tough job to get the stretcher down these steps," said Rolleville. "We could help you by lighting the way."［（83）に対応］

（*Countess Cagliostro*, pp.60-61）

ここでは，特に，発話時において話者が先行文脈や発話時状況を受けての判断を下しているわけではなく，すでに「崖を下って階段を進むこと」が発話時までに決まっていると解釈できるので，「崖を下って階段を進むことは困難である」という状況の実現に向けてすでに事態が（少なくとも，主観的には）進みつつあることを示している．また，当該状況は実際に実行しようとする事柄に

対する評価を表しているので，特定的状況に言及していると言える．したがって，aller未来形とBGT未来形が対応する（82）の場合と同じ説明が当てはまる．

生物主語を取る場合でも，発話時における話者の意志を表さない解釈ができ，したがって，上で見た説明が当てはまる場合もあった．（24）がそれであったが，ここでは（85）として再掲する．

（85）a. Je lui dis: — Enfin, ça y est!
— Quoi?
— Les Arabes!
— Quels Arabes?
— Les Arabes qui sont là, avec vous! ... Prévot me regarde drôlement, et j'ai l'impression qu'il me confie, à contre-cœur, un lourd secret:
— Il n'y a point d'Arabes...
Sans doute, cette fois, je **vais pleurer**.

b. I said:
"At last, eh?"
"What do you mean?"
"The Arabs!"
"What Arabs?"
"Those Arabs here, with you!"
"Prévot looked at me queerly, and when he spoke I felt he was reluctantly confiding a great secret to me:
"There are no Arabs here."
This time I know I **am going to cry**.
［(85a）に対応］

たとえ生物主語（特に，１人称主語）であっても，話者が知識として知っている扱いにしたり，高い蓋然性を表す認識的表現と共起したりする場合は，当該状況は話者（主語）の意志とは切り離されたものして扱うことが可能である．この場合，発話時における「意志」は中和されるので，発話時においてすでに事態が進行中であるということを表すことが可能となる．したがって，BGT未来形の使用が可能となる．

その一方で，BGT未来形は，その準備段階が発話時において当てはまって

いるという点で発話時（現在時）に定位するので，話者は準備段階が表す兆候から必然的に生じる事態（不定詞状況）を予言することになり，話者の確信を表す解釈が可能である．この点も，BGT未来形の時間構造（図２）からの必然的帰結である．

さて，ここで問題となっているaller未来形とBGT未来形は，sans doute ‘most probably’やI knowと共起しているので，１人称主語と共起していても意志性に関しては弱いが，文脈から話者が実現性の高い未来の状況を表したいことが見て取れる．したがって，発話時との連続性を表すaller未来形ならびに発話時においてすでに事態が進行中であることを示すBGT未来形ならば，この状況に適合するということで両形式が選択されているということになる．

ただし，aller未来形がBGT未来形に対応する解釈の場合でも，「意志」の解釈が出てくることもあった．３．２節でのCelle（1997）の指摘にあるように，aller未来形とBGT未来形が対応する場合，両形式は発話時に先立った意志の存在を表すことができる．以下に，(26）を（86）として再掲する．

（86）a. Je lui dis que je **vais** le **présenter** à ma famille, il veut fuir et je ris.
　　b. I tell him I’**m going to introduce** him to my family. He wants to run away. I laugh.［(86a）に対応］

時間構造の観点からは，BGT未来形（図２）もaller未来形（図４）も，発話時に当てはまる準備段階を表すのであった．ただし，be going toが表す準備段階は，発話時において進行中であったので，その開始点（onset）はすでに過去である．したがって，BGT未来形が「意志」を伴った解釈を受ける場合は，過去にすでに意志決定がなされ，それが発話時においてもまだ継続しているという解釈を表すことになる．言い換えると，BGT未来形の時間構造は，話者が「不定詞状況の未来時における実現に向けて，意志をもって時間軸上を進んでいる」という認知的スキーマを反映しているので，「発話時に先立った意志」の解釈を許すということになる．他方，allerが表す準備段階自体は，発話時において初めて生じても，それに先立って生じても良かったので，「意志・決心」が生じるのは発話時より前でも，発話時においてでも良いということになる．BGT未来形に言い換えられる場合は，前者の解釈ということになり，３．３節のLarreya（2001）の「意志・決心」に関する部分で見たように，後者の解釈の場合はwill未来形に言い換えられることになる．

他にも３例ほど，aller未来形がBGT未来形に対応し，発話時に先立って成立している「意志」の解釈を伴う場合を見ておく．

(87) a. Elle [=Joséphine] avait gardé son chapeau. Il le lui enleva et s'en coiffa, rabattant un peu les ailes pour bien dégager les fleurs violettes, et nouant les brides autour de son cou, ce qui lui masquait le visage. Puis il donna ses dernières instructions.

«Je **vais** vous **ouvrir** le chemin. Dès qu'il sera libre, vous vous en irez tranquillement par la route jusqu'à la cour de ferme où votre voiture est garée...

(Maurice Leblanc, *Arsène Lupin La Comtesse de Cagliostro*, pp.113-114)

b. She had kept her hat on. Raoul grabbed it and put it on his own head, pulling down the sides to expose the violets on top, while trying the ribbons under his chin to better hide his features. Then he gave her his final instructions:

"I'**m going to clear** the way. As soon as it is safe to do so, walk quietly along the road to the farm yard where your carriage is waiting... [(87a) に対応] (*Countess Cagliostro*, p.81)

(88) a. ...Elle [=Juliette] se tut quelques instants, puis brusquement:

— C'est après-demain que tu pars?

— Il le faut bien.

— Qu'est-ce que tu **vas faire** cet hiver?

— Ma première année de Normale.

— Quand penses-tu épouser Alissa?

— Pas avant mon service militaire...

(André Gide, *La Porte Étroite*, p.517)

b. She was silent for a few minutes and then asked abruptly:

"You're going away the day after to-morrow?"

"Yes, I must."

"What **are you going to do** this winter?"

"It's my first year at the Ecole Normale."

"When do you think of marrying Alissa?"

“Not before I’ve done my military service...”
［(88a) に対応］　(*Strait is the Gate*, p.22)

(89) a. — Tu regarderas, la nuit, les étoiles. C’est trop petit chez moi pour que je te montre où se trouve la mienne. C’est mieux comme ça. Mon étoile, ça sera pour toi une des étoiles. Alors, toutes les étoiles, tu aimeras les regarder...Elles seront toutes tes amies. Et puis je **vais** te **faire** un cadeau...»
(Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, p.194)

b. “At night, you will look up at the stars. Mine is too small to point out to you. It is better that way. For you, my star will be just one of many stars. That way, you will love watching all of them...They will all be your friends. What is more, I **am going to give** you a present.”
［(89a) に対応］　(*The Little Prince*, p.85)

まず，(87) は，ジョゼフィーヌを追跡中の連中がいて，彼女が「彼らが自分を追いかけてくる」と述べた後の場面の記述である．第１段落で描写されている一連の動作が行われている間に，ラウール（＝ルパン）はすでに「彼女のために道を切り開く決心」をしており，その結果として，「彼女に与える最終的な指示」の一環として当該未来形を含む文を発言したと解釈できる．他の２例も同様の解釈が可能である．(88) では，当該未来形を含む文は聞き手の意志（この冬にする予定）が発話時に先立ってすでに決まっていると，女性の話者（ジュリエット）が想定していると解釈できるし，(89) では，星の王子様は，発話時に先立ってすでに「飛行士に贈り物を与える」ことを決めているので，先行文脈とは独立した命題として解釈できる．したがって，これらの事例は，発話時に先立って決定された「意志」を伴うaller未来形ならびにBGT未来形を含む文と言える．

４．３．８　フランス語の単純未来形とBGT未来形が対応する場合

本節では，フランス語の単純未来形とBGT未来形が対応する場合について，なぜそうなるのかも時間構造の観点から説明できることを見る．まず，当該場面は，未来の定位が存在しない場合で，特に，BGT未来形が発話時に先立った意志を伴う解釈の場合がこれに当たるのであった．この点に関して，

Celle（1997）は，単純未来形とBGT未来形は未来の定位が確立されていなくても用いられうるが，will未来形は付随型命題を表すために未来の定位がないと用いられないからと述べているが，これも各形式の時間構造からの帰結として説明できる．

具体例として，(27）を（90）として以下に再掲したものを見てみよう．

（90）a. Ecoute-moi. Nous allons toutes deux cet après-midi à Providence consulter un médecin que **nous ramènerons** avec nous. Christine restera ici, et c'est Dinah qui prendra soin d'elle. Veux-tu me promettre que tu n'iras pas près de la chambre de Christine pendant notre absence?

b. Listen. We are both going to Providence this afternoon to consult a doctor, and we **are going to bring** him back here with us. Christine is to remain here, and Dinah will look after her. Will you promise me that you will not go near Christine's room while we are away?
［(90a）に対応］

BGT未来形の時間構造（図２）では，発話時において進行中の準備段階に時間焦点が当てられている．したがって，（発話時に当てはまっている状況の延長線上に当該状況が生じるという意味で）未来時に言及するための基盤を内在的にもっていると言えるので，未来の定位の確立を必要としない．特に，意志の解釈の場合は，発話時における主語の心的状態が前面に出てくるが，これは生物主語，特に１人称主語の場合，発話時において進行中の準備段階は，発話時に先立って決心されたその人物の意志を表すと解釈できるため，未来の定位を問題にしていないことが分かりやすい．他方，フランス語の単純未来形の時間構造（図３（i)）では，「未来時領域に当該状況の出来事時が生じる」ことを伝えているだけである．未来の特定時への言及がある場合は当該状況が未来の定位を確立することにつながるし，自らが未来の特定時に言及しない場合は当該状況は未来の定位を確立しない（この場合，すでに存在する未来の定位に照応する形で用いられうる）.[31] また，will未来形が付随型命題を表すのも，その時間構造から説明できる．図１（i)（ii）が示すように，不定詞自体は潜在的状況を表すが，toのような時間軸上と結びつける要素がないため，その使用には未来の定位の確立が必要となり，その定位に照応する形で用いられるから

である．同様に，aller未来形も，図４が示すように，不定詞自体は潜在的状況を表し，toのような時間軸上と結びつける要素がないため，時間軸上の定位に関しては中立的である．したがって，先行文脈で確立された未来の定位に照応する形で用いることは可能である．以上の観察から，（91b）や（92b）のように，２つ目の未来表現文は，英語ではwill未来形による照応となるのに対し，フランス語では，(91a）のように，単純未来形による照応も，(92a）のように，aller未来形による照応も可能となる．

（91）a. Donc, sur ce plan-là, j'ai confiance et je me **ferai** un réel plaisir de skier là-dessus. Le ski de vitesse en démonstration aux Jeux **constituera** une superbe vitrine pour notre sport.（＝（28a））

b. So I feel quite confident on that score and I'**m** really **going to enjoy** skiing on it. Speed skiing as a demonstration sport at the Olympics **will constitute** a superb show case for our sport.（＝（28b））
［(91a）に対応］

（92）a. «Mon petit chéri **sera** bien mignon, bien raisonnable, il **va** se **laisser** mettre des gouttes dans le nez bien gentiment.»（＝（29a））

b. "My little darling **is going to be** very sweet, very good, he'**ll let** me put the nice drops in his nose."（＝（29b））
［(92a）に対応］

４．３．９　指示を表す用法の場合

最後に，Larreya（2001）で観察された，命令や提案などの指示を表す場合に用いられる未来表現について見ておこう．この場合，フランス語では単純未来形もaller未来形も可能であったのに対し，英語ではwill未来形のみ可能で，BGT未来形は難しかった．具体例として，(40）を（93）として，(41）を（94）として以下に再掲する．

（93）Linda, vous m'**appellerez** ce numéro, s'il vous plaît.（...vous **allez** m'**appeler**....）

（94）Linda, **will** you **get** me this number, please?（...? you **are going to get** me ....）［(93）に対応］

まず，命令などの指示を受けた人物がそれを遂行する場合，当該状況の実現は命令（指示）を出した時，すなわち，発話時よりも未来にくるという特性に目を向ける必要がある．Will未来形（図１（i））は，その時間構造上，命令などの指示がもつ特性と合致するので，この用法を許す．なぜなら，willは意味レベルでは（時間構造的には），通例の「未来の予測」と変わらないが，主語が２人称であることや文脈情報から，語用論的に「命令」などの発話行為を伴う解釈が得られると分析できるからである．話者が自らの未来に対する予測を聞き手に伝えることで，話者がその実現を望んでいることが聞き手に伝わり，その結果，語用論的に「命令」や「提案」などの解釈が生じる（Wada 2013a: 57）．フランス語の単純未来形（図３（i））の場合は，唯一の出来事時が未来時領域に生じる時間構造をもつので，この特性と合致する．Will未来形の場合と同様，未来時領域に当該状況が当てはまるということを，話者が聞き手に伝えることで，話者がその実現を望んでいることが聞き手に伝わるからである．さらに，aller未来形の場合（図４），通例，不定詞の出来事時は発話時と断絶した未来時には生じにくいという制限があったが，命令の中身を実行するのは発話時と連続した未来時であっても支障はない．また，allerが表す準備段階は発話時において進行中でなくてもよい．したがって，英語のwill未来形ならびにフランス語の２つの未来表現は，時間構造的にこの用法を許すと言える．

他方，BGT未来形（図２）がこの用法を許しにくいのは，「発話時においてすでに進行中の準備段階」を含み，かつ，toの存在により不定詞状況の実現が含意されているため，発話時において初めて生じる心的態度を表すことができず，したがって，それによって何がしかの指示が引き起こされるという図式が成り立たないからである．

５　おわりに

時制構造ならびに時間構造の構築の際，各時制形式の構成要素がもつ特徴が合成的に反映し，また，当該形式が生起する言語環境や時制構造以外の要因（意味的・統語的・語用論的要因ならびに文脈的要因）の影響を受けて生じる時間構造のバリエーションを許す小生の時制モデルにおいては，同一言語内でも通言語間でも，比較される時制形式の間に共通する構成要素があればその時間構造に類似点が生じるのに対し，異なる構成要素があればその時間構造に相違点が生じるという予測が成り立ち，その結果，時制現象にも違いが生じると

予測できる．この立場に立って，本稿では，形式的には似ていても進行形の有無ならびにtoの有無の差がある英語のBGT未来形とフランス語のaller未来形の時制現象における類似点と相違点を，時間構造の観点から分析した．

また，小生の時制モデルは，これまでに英語の他の未来表現の比較分析や英語のwill未来形とフランス語の単純未来形の比較分析にも用いられてきた．したがって，それを用いて，特に，主要な未来表現であるwill未来形や単純未来形との比較も行いつつBGT未来形とaller未来形の比較分析を行うことで，より包括的かつ体系的な分析を行うことができた．これら４つの未来表現の未来時指示の原型版の時間構造は，will未来形が図１（i）に，BGT未来形が図２に，（フランス語の）単純未来形が図３(i)に，aller未来形が図４に示された通りである．類似点ならびに相違点は，（95）にまとめられる．

（95）a. 時制形態素が「現在」であるwill未来形，BGT未来形，aller未来形と，時制形態素が「未来」であるフランス語の単純未来形では，時制構造内の「時間区域」が表す情報に違いが生じる．

b. 時間構造を構成する出来事時の数は，will未来形，BGT未来形，aller未来形が２つであるのに対して，単純未来形は１つである．

c. 未来時に生じる出来事時に関わる状況が不定詞で表されるのがwill未来形，BGT未来形，aller未来形であるのに対して，定形動詞で表されるのが単純未来形である．

d. BGT未来形とaller未来形は発話時における「準備段階」を含むのに対して，will未来形は発話時において生じる話者の心的態度もしくは主語の心的状態を反映した状況を含む．単純未来形には発話時における要素はない．

e. BGT未来形の準備段階は発話時においてすでに進行中であるが，aller未来形の準備段階は必ずしも「発話時において進行中」でなくてもよく，発話時以前から始まることも発話時から始まることも可能である．

f. toをもつBGT未来形の不定詞状況は独立型命題を表し，未来での実現を含意するが，to（に当たる要素）をもたないwill未来形とaller未来形は不定詞自体が潜在的状況を表すので，未来における実現については文脈次第である（したがって，総称性・属性も表せる）．

g. 時間焦点は，出来事時が２つある場合には話者の焦点が向けられた

ほうに当てられるが，１つしかない場合，時間軸上に結びつけるか否か（特定時指示的か否か）で当てられるか否かが決まる．

これらの時間構造の類似点ならびに相違点が，各時制形式の表す時制現象となって現れ，その結果，aller未来形がwill未来形に，フランス語の単純未来形がBGT未来形に対応することもあるし，aller未来形がBGT未来形に対応することもある．

ただし，英語とフランス語の未来表現としては，他にも，フランス語には単純現在形，英語には単純現在形，現在進行形，いわゆる未来進行形など多種多様な時制形式が存在するので，両言語の未来表現の包括的な分析にはこれらの時制形式への言及は不可欠である．また，稿を改めて論じたい．

注

* 本稿の作成にあたり，査読委員の渡邊淳也氏には貴重なコメントをいただいた上，Celle（1997）の解読にあたってお力添えをいただいた．また，筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻の大学院生である五十嵐啓太君，本多正敏君，田代雅幸君，松田里沙さんには，合同研究会にて本稿のアイデアを聞いてもらい，有益なコメントもいただいた．記して感謝の意を表したい．なお，本研究はJSPS科研費24520530，24320088の助成を受けている．

1 フランス語学では，aller+不定詞の形式は伝統的によく「近接未来」と呼ばれるが，必ずしも，近い未来ばかりを指すわけではない．この理由もあり，渡邊（2014）はこの形式を「迂言的未来」と呼ぶ．本稿では，BGT未来形との比較もある上，will未来形も「迂言的未来」なので，aller未来形と呼ぶことにする．

2 本稿は原則として主節や独立節に生じる用例を中心に扱うが，条件節におけるBGT未来形とaller未来形を詳しく比較分析し，両形式の類似点と相違点を明らかにした論考にLansari（2009）がある．その主な論点は，if-節中のBGT未来形もsi-節中のaller未来形もいわゆる「閉じた条件節（closed conditional）」を表すが，aller未来形は前件の内容を別の話者に帰属させる必要があるのに対し，BGT未来形はそれに加えて前件内容が客観的（objective）であっても良く，それゆえに頻度が高いというものである．

3 フランス語の単純未来形に言い換えることができるからwillは未来時制マーカーであるとする分析もあるが（例えば，Salkie 2010），そのような分析では，和田（2013）で観察した両形式の違いを説明できないばかりか，本稿で見るように，aller未来形がwill未来形に，（フランス語の）単純未来形がBGT未来形に対応する場合があることも説明できない．

「未来」は，時制と法・モダリティの境界が不鮮明になる範疇であるとよく指摘される（Dahl 1985: 103; cf. Lyons 1977）．したがって，時制理論の中で「未来」に言及する時には，必ず何らかの法性が伴うと考えるのは自然なことである．このことは，和田（2013）で，フランス語の未来時制形態素が確立する「未来時区域」に「予測」のモダリティが貼り付くと仮定していることに動機づけ

を与えてくれる．他方，will未来形のほうも，willを法助動詞と考え，不定詞部分が未来時言及に寄与すると考えるので，法性を伴うことになる．違いは，英語のwill未来形はモダリティベースなのに対し，フランス語の単純未来形は時制ベースであるという点である（フランス語では，未来時制形態素が時制構造の中の「時間区域」の確立に寄与するという意味で時制ベースと言える）．こう捉えることで，両形式の類似点と相違点を十分動機づけられた形で分析することができる．Will未来形がモダルベースで，フランス語の単純未来形が時制ベースであるとする根拠の中で，和田（2013）で取り上げられていない根拠に，次の例がある．

（i）Mary will say that she will be tired.（Enç 1996: 350）

（ii）Léon dira vendredi qu'il partira dans trois jours.（Smith 1997: 211）
'Leon will say on Friday that he will leave in 3 days.'

Enç（1996: 350）が述べるように，（i）の補文節時は主節時より未来にくる解釈となる（注16も参照）．これは，小生の時制モデルでは，willは元話者Maryの心的態度（「予測」のモダリティ）を表すため（Wada 2001），willの出来事時は主節時（元発話時）に当てはまり，不定詞の出来事時がそれより未来に当てはまることになるからである．他方，Smith（1997: 211）が述べるように，（ii）の補文節時は，主節時より未来にくる解釈と，伝達時よりも未来にくる解釈がある．後者の解釈が可能ということは，時制形式選択は基本的には発話時（伝達時）を基点とするので，フランス語の単純未来形は時制ベースという主張を可能にする．また，フランス語の単純未来形は，その「未来時区域」に「予測」のモダリティが貼り付いているため（和田 2013），モダリティベースである英語のwill未来形に対応する解釈も可能であると言える（注24も参照）．

4　英語のwill未来形もフランス語の単純未来形も，（i）（ii）が示すように，現在時の推測を表す用法をもつ．

（i）Notre ami est absent: il **aura** encore sa migraine.
ともだちは欠席している．また，例の偏頭痛だろう．
（渡邊 2014: 143; cf. Celle 2004/2005: 192）

（ii）That'**ll be** the electrician—I'm expecting him to call about some rewiring［on hearing the doorbell ring］.（Leech 2004: 86）

ただし，Celle（2004/2005）や渡邊（2014）が指摘するように，フランス語の場合は，「未来での確認（future verification）」が可能な文脈にしか用いられないという制約がある（この用法の英仏語比較については，和田 2013を参照されたい）．本稿では，未来時指示の用例のみを扱うこととする．なお，本稿では「～未来形」という用語を用いているが，あくまでも形式を指す言葉であることに留意されたい．

5　Celle（2004/2005）は，Celle（1997）に沿ってフランス語の単純未来形と英語のwill未来形の比較分析を扱った論考であるが，aller未来形についての記述も若干含まれている．

6　ただし，話しことばでは，aller未来形と未来時指示の副詞との共起例は多くみられる（南舘 1998；練尾 1998；渡邊 2014）．この点に関して，南舘（1998）はaller未来形による単純未来形の代用が進んでいると述べているのに対し，渡邊（2014）は，たとえこれらの共起が生じていても，基本的には発話時における状況との（広い意味での）連続性が保証される文脈においてであると述べ

ている．渡邊は，さらに，話しことばでこの共起パターンが多いのも，書きことばよりも発話状況との結びつきが意識されていると思われるからと述べている．筆者も渡邊の主張に賛成であるが，練尾（1998: 40-41）は基本的に渡邊と同じ考えを示しつつ，以下の当該共起パターンが起こっている例を，発話時と断絶した未来を表す例として指摘している．

（i）En 1996, les investissements **vont conforter** la reprise en Europe.
1996年には，設備投資がヨーロッパの景気回復を強化することになろう．

（ii）Je serai ce soir à Paris, et demain matin je déjeunerai à Saint-Gratien où je **vais rester** plusieurs jours.
私は今晩パリにいるだろう．そして，明日の朝は，サン・グラシアンで朝食を取るだろう．そこには数日とどまることになろう．

これらをどのように扱うかは今後の課題としたい．

7 渡邊（2014: 135）は，Franckel（1984）に基づき，未来時指示の副詞と共起した場合でもaller未来形は発話時指向性を保持すると述べている．その証拠として，渡邊は以下の例を挙げている．

（i）Maintenant, on **va manquer** d'argent à la fin du mois.（渡邊 2014: 135）
今の段階で，月末にはお金が無くなるだろう．

この例では，allerがmaintenantによって，manquer（不定詞）がà la fin du moisによって時間修飾を受けている．英語では，このような共起パターンは，BGT未来形にもwill未来形にも当てはまる．

（ii）Now we {**are going to/will**} have no money at the end of the month.
（Wada 2001: 220; cf. Huddleston 1969; Haegeman 1989）

8 このことは，will未来形が（他の状況への）付随性（contingency）を表すという特徴と合致する（e.g. Binnick 1971, 1972）．

9 Celle（1997）では，単純現在形で言い換えられる場合に関する特徴づけがなされているが，本稿では単純現在形は考察の対象外とするのでここでは触れない．

10 フランス語では単純未来形も，総称的文脈において当該状況の現実化を前提としない場合に使用できるが，この場合はaller未来形とは対照的に，未来時の状況であることに重点が置かれることになる．

11 BGT未来形の文法化がかなり進んだ方言では，「予測可能性（predictability）」（総称的な現在の状況に対する推測）を表すことがある（Collins 2009: 144）．

（i）Even though we've got this wretched document we're talking about there's always **going to be** an Asterix book by the bedside or something like that.
（Collins 2009: 144）

ただし，Collins（2009: 144）も述べるように，will未来形の場合に比べてはるかに頻度は低い．

12 （25）に関して，発話時において話題を変える時にmaintenant 'now'が用いられた場合は，「話題が変えられた発話時状況」に依存することになるので，aller未来形は可能であるが，BGT未来形は不可能である（英語ではwill未来形となる）．

（i）Maintenant, vous **allez** me **parler** de vous.
いまから（≒さて），あなたの話をしてください．

13 渡邊淳也氏（個人談話）によると，単純未来形で未来の定位を確立した後にそれに依拠する形でaller未来形が用いられる場合は，aller未来形は発話時基準で

はなく，物語の現在（語られている物語の世界の現在時）を基準時とし，その時点から見て「実現しつつあること」を示すという説明が可能ということである．

14　現代フランス語では，単純未来形によって現在時における推測が表されるのは方言において見られる傾向のようで，標準語では，代わりに，devoirを用いて現在時における推測を表す傾向にある（Celle 2004/2005, 渡邊 2004, 2014）．また，渡邊淳也氏（個人談話）によると，aller未来形が現在時における推測を表すのはかなり特殊な場合で，例えば，(38）の場合，「まさに今から扉を開けるが，そこにはアメリアがいるだろう」というような切迫した場面で用いられるようである．

15　英語の未来表現であるwill未来形とBGT未来形の時間構造については，小生の一連の論考の中で修正・発展はあるものの，基本的な部分は不変である．

16　ここでは，時制形式使用の際，話者が文法的時間の直示的中心である「話者の時制視点」を認知的世界の直示的中心である「話者の意識」と融合させることで，時間値計算の出発点が発話時になる場合を想定している．この融合が起こる場合がデフォルト（無標）の場合である．有標の場合としては，(i）の例が示すように，未来時に言及する補文節に生じるwill未来形などがあり，この場合は発話時以外の時点（ここでは，主節時）が時間値計算の出発点となる．

(i）Mary will say that she will be tired.（Enç 1996: 350）

なぜ，話者の時制視点と意識が融合するのがデフォルトの場合であるかについては，小生の一連の論考をご覧いただきたい．

17　他に，意志未来の場合にwillの出来事時に時間焦点が当てられていることを支える根拠として，本時制理論では，動的モダリティは命題内容を構成する要素という立場に立っているので，焦点化の対象になりうること，また，(i）が示すように，意志未来の場合にはwillにストレスが置かれること，などが挙げられる．

(i）I WILL solve this problem.（Huddleston and Pullum 2002: 193）

18　小生の時制理論で言うところの「単純未来」用法は本稿では扱わず，本稿で扱う未来時指示の場合はすべて「予測未来」である．小生の時制理論では，「単純未来」はwillの表す状況が意味漂白化して，標的となる出来事時を測るための基準時の役割以外を果たさないタイプの出来事時を表す場合のことを言う．したがって，「単純未来」では，不定詞状況は話者の予測の対象にならないほど確実に生じる未来状況を表す．例えば，(i）がその例になる．

(i）Tomorrow will be Sunday.

19　Will未来形の時間構造において時間焦点が反映しない場合もありうる．例えば，(36）が示すような，「性質・傾向」を表す場合がその例である．

20　Brisard（2001）は，認知文法の枠組みに則り，指示的ならびに認識論的特性の観点からBGT未来形の時間的意味を特徴づけている．より具体的には，BGT未来形を非既定的（non-given），かつ，現在指向（present）という特性によって特徴づけている．また，彼は，時間的経路（temporal path）と時間メタファー（temporal metaphor）に基づくBGT未来形の分析を批判しており，その理由として，例えば，(i）では「未来時における不定詞状況（地震）の実現に向けて，発話時において実際に何かが進行中である」ことを表さないことを挙げている．

(i）An earthquake is going to destroy that town.（Brisard 2001: 279）

小生の分析も時間的経路と時間メタファーを反映させた時間図式を採用しているが，例えば，「進行中」という概念はあくまでも認知スキーマのレベルの話であり，捉え方を反映しているのであって，実際に何かが進行中である必要はない．また，Brisard（2001）の言う「非既定的」と「現在指向」の2つの特徴については，後者は「準備段階」が発話時に当てはまっていることから，前者はまだ不定詞状況そのものが発話時において実現していないことからの帰結として導きだせる．したがって，小生の分析はBrisard（2001）の批判を回避でき，かつ，彼の特徴づけも取り込んだ分析となっている．

21 Celle（1997: 25）もBGT未来形を構成要素単位に因子分解し，beのもつ特性，進行形のもつ特性，toのもつ特性に対して，それぞれ小生が主張するのとほぼ同じものを仮定することで，当該構文が示す現象の説明を試みている．しかしながら，本文でも述べたように，一般的な時制理論に基づいた分析ならびにそれに基づいた時間構造による分析にはなっていない．

22 ４．２．１節で見た図１（ii）の「意志未来」のwill未来形の時間構造は，時間焦点がwillの出来事時E_1に当てられているという点で，BGT未来形の時間構造と共通している部分がある．本文で見たように，この場合の不定詞状況は意志に付随する付帯的な状況であることから，意志に関係する出来事時E_1に時間焦点が当たっており，それによって意志の部分が強調され，その結果，それに伴って生じる不定詞状況の実現の確実性も高くなる．したがって，「意志未来」のwill未来形は，（i）に示されるように，不定詞状況の実現を打ち消す内容が後続すると容認性が下がる．

（i）?I'll cut the grass but unfortunately I won't be able to.（Salkie 2010: 211）

なお，will未来形やBGT未来形と似た「意志」や「願望」を表すintendやwantを使った場合，不定詞状況の実現の蓋然性はwill未来形やBGT未来形に比べて高くない．

（ii）a. I intend to leave tomorrow.（Leech 2004: 59）
b. I want to cut the grass but unfortunately I won't be able to.
（Salkie 2010: 211）

このことは，次のように説明される．まず，「意志未来」のwill未来形の場合，法助動詞willが確立する可能世界の中に不定詞状況が生じるため，意志に関係する出来事時E_1に時間焦点が当たると，それに依存する後続状況の実現性までもが高くなる．他方，（ii）では，時間焦点は同じく現在時に当てはまるintendやwantの出来事時E_1に当てられるが，この場合，toが存在するために，認知スキーマ的に主語の心的状態と不定詞状況との間に時間経路上のギャップが想定され，その分依存関係は密接ではなくなる．したがって，「意志」や「願望」が強調されても，その射程範囲が「意志」や「願望」部分に限定され，不定詞状況の実現性の高さとは連動しない．それゆえ，（iia）では実際に出発したか否かは不明であるし（Leech 2004: 59），（iib）では「芝を刈る」ことの実現を打ち消す内容を続けることが可能となる．BGT未来形にもtoが存在するので，一見，この説明は矛盾するように見えるが，そうではない．BGT未来形に存在するtoは文法化したbe going toという動詞ユニットの一部を形成しており，BGT未来形はbe going toと原形不定詞とに因子分解されるので，（ii）で見られるto不定詞のtoの働きとは異なると考えることができる．

23 注11の（i）で見たBGT未来形が「予測可能性」（現在時指示）を表す場合は，

その時間構造は図２ではなく，文法化が進むことで準備段階の内部構造，特に「未来時での実現に向けて事態が進行中である」部分が意味漂白化し，その出来事時は単に不定詞状況を測るための基準時と化している（Wada 2001: Ch.7, 2009）．Will未来形の時にも見たように，本稿の枠組みは，このようなダイナミックな側面も記述できる潜在性をもっている．

24　この２つの図式は和田（2013）に基づくが，そこでは「未来時区域」には，デフォルトの場合，「予測」のモダリティが文法化して貼り付いているとし，「断定」のモダリティが文法化して貼り付いている「現在時区域」とは区別されている．その根拠は主に未来時指示の単純現在形との差異を説明することと関連するが，詳しくは和田（2013）を参照されたい．本稿では，単純現在形（「現在時区域」をもつ時制形式）との比較は行わないので，時間区域に貼り付いたモダリティにはあまり触れないこととする．

25　この点は渡邊淳也氏（個人談話）のご指摘に基づいている．

26　Allerが表す準備段階の図示の仕方は，渡邊（2014: 146）にヒントを得ている．

27　なお，注11で見た，BGT未来形が現在時における推測を表す場合も，注23で触れたように，文法化の観点から説明できる．しかしながら，aller未来形と違ってBGT未来形の場合は，(i) 未来における不定詞状況の実現をマークするtoが存在すること，(ii) 準備段階が未来へ向けて進行中であることをマークする進行形が存在することから，両要素（toと準備段階）ともに意味漂白化が進むのは相対的に容易ではないと考えられる．ただし，この点は詳しく調べていく必要があるので，今後の課題としたい．

28　ここで，フランス語の単純未来形には図３（ii）で見た「現在時指示」の時間構造があるのにもかかわらず，なぜ現在時指示の副詞と共起できないのかという疑問が生じるかもしれない．しかし，単純未来形の「現在時指示」は（英語のwill未来形と比べて）「未来における確認（future verification）」を基にしたものであり，時間概念としての未来性が重要な役割を果たす点（これは，単純未来形の時間区域が「未来」であることによる），さらに，出来事時が１つしかない中でそれが現在時領域に生じる場合，発話時よりも後続する解釈を保証する「くさび」となる時点（will未来形・BGT未来形・aller未来形の助動詞の出来事時E_1）がない点を考えると，発話時直後に生じると想定される現在時領域への言及は単純未来形には難しいと思われる．なお，当該状況が発話時直後に言及するのは，当該状況がSmith（1997）の言う「完了相視点（perfective viewpoint）」を伴っているからである．

29　BGT未来形にも「単純未来」用法（ここで言う「単純未来」は，自然の成り行きの結果生じる未来の状況に言及する場合）はあるが，本稿では扱わない．Will未来形の「単純未来」用法との比較も含めて，別の機会に詳しく考察したい．ただ，Celle（1997）が言うように，BGT未来形は移動動詞goの意味，進行形の意味，toの意味の反映というだけでは，こういったBGT未来形の用法のバリエーションは説明できない．他方，本稿が依拠している，小生の時制理論に基づいた時間構造による分析を行うとこの点も対処可能である．

30　ただし，aller未来形がwill未来形に対応するのは「未来時への言及」がある場合で，未来指示性がなく，性質的価値が強調される場合は単純現在形を用いる（Celle 1997: 34）．小生の時制モデルに基づいた時間構造による単純現在形とaller未来形の対応関係については，今後の課題としたい．

31 Will未来形（図１（i））では，「未来時領域に生じる不定詞状況の出来事時は非定形のものであり，現在時に当てはまる定形動詞の出来事時に依存している」ので，たとえ不定詞状況が未来の特定時と結びついていても，時間構造的には，現在時から独立した形では未来の定位を確立できない．もちろん，未来の定点を示す副詞との共起によって，あるいは文脈によって（非意志の場合），未来の定時点を指すことは可能であるが，現在から独立した未来の定位を確立することにはならない．

参考文献

Binnick, Robert I. (1971) "*Will* and *Be Going To*," *CLS* 7, 40-52.

Binnick, Robert I. (1972) "*Will* and *Be Going To* II," *CLS* 8, 3-9.

Boyd, Julian and James P. Thorne (1969) "The Semantics of Modal Verbs," *Journal of Linguistics* 5, 57-74.

Brisard, Frank (2001) "*Be Going To*: An Exercise in Grounding," *Journal of Linguistics* 37, 251-285.

Celle, Agnès (1997) *Etude Contrastive du Futur Français et de Ses Realisations en Anglais*, Ophrys, Paris.

Celle, Agnès (2004/2005) "The French Future Tense and English *Will* as Markers of Epistemic Modality," *Languages in Contrast* 5, 181-218.

Coates, Jennifer (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*, Croom Helm, London.

Collins, Peter (2009) *Modals and Quasi-modals in English*, Rodopi, Amsterdam.

Copley, Bridget (2009) *The Semantics of the Future,* Routledge, New York.

Dahl, Östen (1985) *Tense and Aspect Systems*, Basil Blackwell, New York.

Declerck, Renaat (1991) *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*, Routledge, London.

Declerck, Renaat (in cooperation with Susan Reed and Bert Cappelle) (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase Volume I: The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*, Longman, London.

Duffley, Patrick J. (2006) *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*, Peter Lang, New York.

Enç, Mürvet (1996) "Tense and Modality," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by Shalom Lappin, 345-358, Blackwell, Oxford.

Fleischman, Suzanne (1982) *The Future in Thought and Language: Diachronic Evidence from Romance*, Cambridge University Press, Cambridge.

Franckel, J.-J. (1984) «Futur « simple » et futur « proche » », *Le Français dans le Monde* 182, 65-70.

Haegeman, Liliane (1989) "*Be Going To* and *Will*: A Pragmatic Account," *Journal of Linguistics* 25, 291-317.

Helland, Hans Petter (1995) "A Compositional Analysis of the French Tense System," *Tense Systems in European Languages* II, ed. by Rolf Thieroff, 69-94, Niemeyer, Tübingen.

Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*, MIT

Press, Cambridge, MA.
Huddleston, Rodney (1969) "Some Observations on Tense and Deixis in English," *Language* 45, 777-806.
Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
Kashino, Kenji (2005) "'Be Going To' and Emotionality,"『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』41, 1-13.
Klinge, Alex (1993) "The English Modal Auxiliaries: From Lexical Semantics to Utterance Interpretation," *Journal of Linguistics* 29, 315-357.
Lansari, Laure (2009) "The *Be Going To* Periphrasis in *If*-Clauses: A Comparison with the *Aller* + Infinitive Periphrasis in French," *Languages in Contrast* 9, 202-224.
Larreya, Paul (2001) "Modal Verbs and the Expression of Futurity in English, French and Italian," *Modal Verbs in Germanic and Romance Languages*, ed. by Johan van der Auwera and Patrick Dendale, 115-129, John Benjamins, Amsterdam.
Leech, Geoffrey (1987) *Meaning and the English Verb*, 2nd ed., Longman, London.
Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed., Longman, London.
Lyons, John (1977) *Semantics*, Cambridge University Press, Cambridge.
Matte, Edward J. (1989) *French and English Verbal Systems*, Peter Lang, New York.
McIntosh, Angus (1966) "Predictive Statements," *In Memory of J. R. Firth*, ed. by C. E. Bazell, J. C. Catford, M. A. K. Halliday and R. H. Robins, 303-320, Longman, London.
南舘英孝（1998）「Aller+*inf.*と単純未来」東京外国語大学グループ（セメイオン）『フランス語を考える―フランス語学の諸問題II』22-33，三修社，東京.
中右実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店，東京.
練尾毅（1998）「近接未来形について」東京外国語大学グループ（セメイオン）『フランス語を考える―フランス語学の諸問題II』34-44，三修社，東京.
Nicolle, Steve (1997) "A Relevance-Theoretic Account of *Be Going To," Journal of Linguistics* 33, 355-377.
Nicolle, Steve (1998) "*Be Going To* and *Will*: A Monosemous Account," *English Language and Linguistics* 2, 223-243.
Ota, Akira (1972) "Modals and Some Semi-Auxiliaries in English," *ELEC Publications* 9, 42-68.
Palmer, Frank R. (1988) *The English Verb*, 2nd ed., Longman, London.
Palmer, Frank R. (1990) *Modality and the English Modals*, 2nd ed., Longman, London.
Salkie, Raphael (2010) "*Will*: Tense or Modal or Both?" *English Language and Linguistics* 14, 187-215.
Smith, Carlota (1997) *The Parameter of Aspect*, 2nd ed., Kluwer Academic, Dordrecht.

Szmrecsanyi, Benedikt (2003) "*Be Going To* versus *Will/Shall*: Does Syntax Matter?" *Journal of English Linguistics* 31, 295-323.

Vet, Co (1994) "Future Tense and Discourse Representation," *Tense and Aspect in Discourse*, ed. by Co Vet and Carl Vetters, 49-76, Mouton de Gruyter, Berlin.

Wada, Naoaki (1996) "Does Doc Brown Know Which Expression Takes Us Back to the Future: *Be Going To* or *Will*?" *English Linguistics* 13, 169-198.

Wada, Naoaki (2000) "*Be Going To* and *Be About To*: Just Because Doc Brown Was Going to Take Us Back to the Future Does Not Mean That He Was About to Do So," *English Linguistics* 17, 386-416.

Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*, Kaitakusha, Tokyo.

Wada, Naoaki (2009) "The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?" *English Linguistics* 26, 96-131.

Wada, Naoaki (2011) "On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-Sentences," *Tsukuba English Studies* 29, 37-61.

Wada, Naoaki (2013a) "A Unified Model of Tense and Modality and the Three-Tier Model of Language Use," *Tsukuba English Studies* 32, 29-70.

Wada, Naoaki (2013b) "On the So-Called Future-Progressive Construction," *English Language and Linguistics* 17, 391-414.

和田尚明（2013）「英語とフランス語の未来表現の比較」『文藝言語研究：言語篇』63, 107-146.

和田尚明（2015）「英語の単純現在形の分析再び」『言語研究の視座』深田智・西田光一・田村敏広（編），292-308，開拓社，東京.

渡邊淳也（2004）『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社，東京.

渡邊淳也（2014）『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社，東京.

Wekker, Herman Chr. (1976) *The Expression of Future Time in Contemporary British English*, North-Holland, Amsterdam.